参考資料１-１

湧別川水系の流域及び河川の概要

（案）

平成１９年１０月３０日

国 土 交 通 省 河 川 局

目　　次

1．流域の自然状況 1
1-1 河川・流域の概況 1
1-2 地形 4
1-3 地質 6
1-4 気候・気象 8
1-5 オホーツク海の流氷 10
2．流域及び河川の自然環境 12
2-1 流域の自然環境 12
2-2 河川及びその周辺の自然環境 19
2-3 特徴的な河川景観や文化財等 21
2-4 自然公園等の指定状況 27
2-5 市民活動 29
3．流域の社会条件 30
3-1 土地利用 30
3-2 人口 32
3-3 産業・経済 34
3-4 交通 35
3-5 関係ある法令の指定状況 36
4．水害と治水事業の沿革 38
4-1 既往洪水の概要 38
4-2 治水事業の沿革 45
5．水利用の現状 48
5-1 水利用の実態 48
5-2 渇水被害及び渇水調整 49
6．河川流況及び水質 50
6-1 河川流況 50
6-2 河川水質 51
7．河川空間の現状 53
7-1 河川敷等の利用の状況 53
7-2 河川の利用状況 55
8．河道特性 56
9．河川管理の現状 58
9-1 管理区間 58
9-2 河川管理施設 59
9-3 砂利採取 59
9-4 水防体制 59
9-5 危機管理への取り組み 61
9-6 地域との連携 61

1.流域の自然状況

1-1 河川・流域の概況

湧別川(ゆうべつ)は、その源を北海道紋別郡(もんべつぐん)遠軽(えんがる)町の天狗(てんぐ)岳(標高 1,553m)に発し、山間部の遠軽町白滝(しらたき)を流れ、丸瀬布(まるせっぷ)で武利(むり)川が合流し、遠軽市街において平野部に出て生田原(いくたはら)川を合わせ、湧別町においてオホーツク海に注ぐ、幹川流路延長 87km、流域面積 1,480km^2 の一級河川である。

湧別川の流域は、遠軽町、上湧別町、湧別町の 3 町からなり、オホーツク圏における社会・経済・文化の基盤をなしている。流域の土地利用は、山林等が約 75%、原野・牧場等が約 14%、耕地は畑作が中心で約 10%、宅地等の市街地が約 1%となっており、流域内は森林資源などに恵まれている。流域内は、酪農を中心とした農業、水産業が盛んで、特に河口の湧別町は全国有数のホタテの産地となっている。

陸上交通としては、JR石北(せきほく)本線、国道 238 号、242 号、333 号等の基幹交通施設に加え、旭川(あさひかわ)紋別自動車道が整備中であり、オホーツク圏と道北・道央圏を結ぶ物資輸送や観光旅客輸送に大きな役割を果たし、交通の要衝となっている。

さらに、河岸にはヤチダモ、ハルニレ等の河畔林が豊かに繁茂しており、サケ、カラフトマス等が遡上し、これらの増殖河川として重要な位置を占める他、ニジマス、サクラマス(ヤマメ)等の渓流釣りに多くの人が訪れるなど、豊かな自然環境に恵まれている。このように、本水系の治水・利水・環境についての意義は極めて大きい。

※遠軽町、生田原町、丸瀬布町、白滝村は平成 17 年 10 月 1 日に遠軽町として市町村合併した。

流域の地形は、山地から海岸までの距離が比較的短く、傾斜地を直流する急流河川に属しており、山間部を渓流の状態で貫流し、中流部の遠軽市街部付近から平野が広がっている。

流域の地質は、上流部は第四紀洪積世の安山岩質溶岩等の火山岩類が分布し、中流部には火山性の岩石を主体とした新第三系が広く分布し、下流部は、砂岩・頁岩の互層から成る。生田原川の合流点付近より下流の河川沿いには、砂礫層からなる河岸段丘が発達している。海岸平野には、礫・砂・粘土の他、一部で泥炭も見られる。

流域の気候は、オホーツク海側の気候区分に属し、平均年間降水量は約 800mm 程度であり、全国でもっとも降水量が少ない地域である。また、オホーツク海は流氷が接岸する海であり、気温は流氷接岸期の 2 月に最も低くなる。

河床勾配は、源流から武利川合流点までの上流部は 1/100 以上の急勾配であり、武利川合流点から生田原川合流点に至る中流部では約 1/250 程度である。生田原川から河口までの下流部では約 1/300～約 1/500 程度で、河口付近の一部が約 1/800 となっており、全川を通じて比較的急勾配である。

源流から武利川合流点付近に至る上流部は、エゾマツやトドマツ、ミズナラ、エゾイタヤ等の混生する針広混交林が広く分布している。山間部を抜けた区間では、明瞭な瀬・淵や部分的に岩河床が露出している箇所もみられ、流れの多様な河川環境を形成し、ハナカジカやオショ

ロコマ等が生息している。

武利川合流点から生田原川合流点に至る中流部は、サケ、カラフトマス等が遡上してくる他、シベリアヤツメ、エゾトミヨ等が生息している。また、マガモ、コガモ等のカモ類の休息場となっている。河川周辺の山付林には、ヤナギ林のほか、ヤチダモ、ハルニレ林が分布している。高水敷は湿性草本群落が分布しているほか、遠軽市街地では公園等が整備され、イベントやスポーツ等に利用されており、地域住民の憩いの場となっている。

生田原川合流点から河口までの下流部は、蛇行を繰り返しながら畑地帯を流下しており、砂礫の中州等が見られ、エゾウグイやカラフトマス、ハナカジカ等が生息している。周囲は山付きと畑地が左右岸交互に見られ、オジロワシ、オオワシ、クマゲラ等の鳥類のほか、河畔林内の水溜り等がエゾサンショウウオやエゾアカガエルの産卵場所となっている。

また、河口付近は比較的緩勾配で、河道は大きく蛇行し、ワンドや細流、瀬・淵等の多様な河川環境を形成している。この区間には感潮区間があり、マルタウグイやエゾハナカジカ等の感潮域に生息する魚類の生息地になっており、河口付近の緩やかな流れは、ヒシクイ、オシドリ等のガン・カモ類やカモメ類の越冬地及び渡りの中継地として利用されている。また、河口部左岸の砂丘地には、ハマニンニクやハマナスの砂丘植生が生育している。

湧別川の治水事業は、大正 4 年 4 月洪水を契機に大正 8 年に治水工事計画が樹立されたが、大正 10 年からの北海道第 1 期拓殖計画では着工に至らず、昭和 7 年の洪水を機に、昭和 9 年から北海道第 2 期拓殖計画の一環として、開盛(かいせい)地点における計画高水流量を 7,000 立方尺(約 1,950㎥/s)として、遠軽町から下流の低平地の洪水氾濫を減少させるため、堤防と捷水路事業を中心に進められた。その後、昭和 32 年に計画を見直し、中湧別地点における計画高水流量を、大正 11 年の既往最大洪水である 1,800㎥/s とした。

昭和 44 年には一級河川に指定され、同年に総体計画を踏襲した工事実施基本計画を策定し、開盛地点において基本高水のピーク流量を 1,800㎥/s として、河道に配分することとした。

さらにその後、平成 10 年 9 月洪水や平成 18 年 10 月洪水等で被害を受け、以後、現在まで築堤、河道掘削等の工事を実施している。

湧別川水系最大の支川である生田原川の治水事業は、生田原市街を洪水から防備するため、北海道が昭和 47 年以降改修に着手し、河道掘削、護岸工事等を実施している。

砂防事業については、支川において北海道が昭和 46 年から砂防堰堤等を整備している。

河川水の利用については、開拓農民による利用に始まり、現在は約 2,500ha に及ぶ農地のかんがい用水に利用されている。また、水道水として遠軽町、上湧別町、湧別町に供給されているほか、工業用水や養魚用水等としても利用されている。水力発電としては、湧別川発電所、瀬戸瀬(せとせ)発電所等により、総最大出力約 26,000kW の電力供給が行われており、全利水量の 95%を占めている。

水質については、河口から丸瀬布取水口及び支湧別川合流点までは A 類型、それより上流までが AA 類型に指定されており、BOD75%値で見ると、近年は概ね環境基準を満たしており、良好な水質を維持している。

河川の利用については、うるおいとやすらぎを得られるオープンスペースとして、遠軽町で緑地公園や桜づつみ、また、ゴルフ場やパークゴルフ場、スポーツ広場等が整備され、クロスカントリースキー大会やフィッシング大会等の様々なイベントが開催されており、四季を通じて多くの市民に広く利用されている。

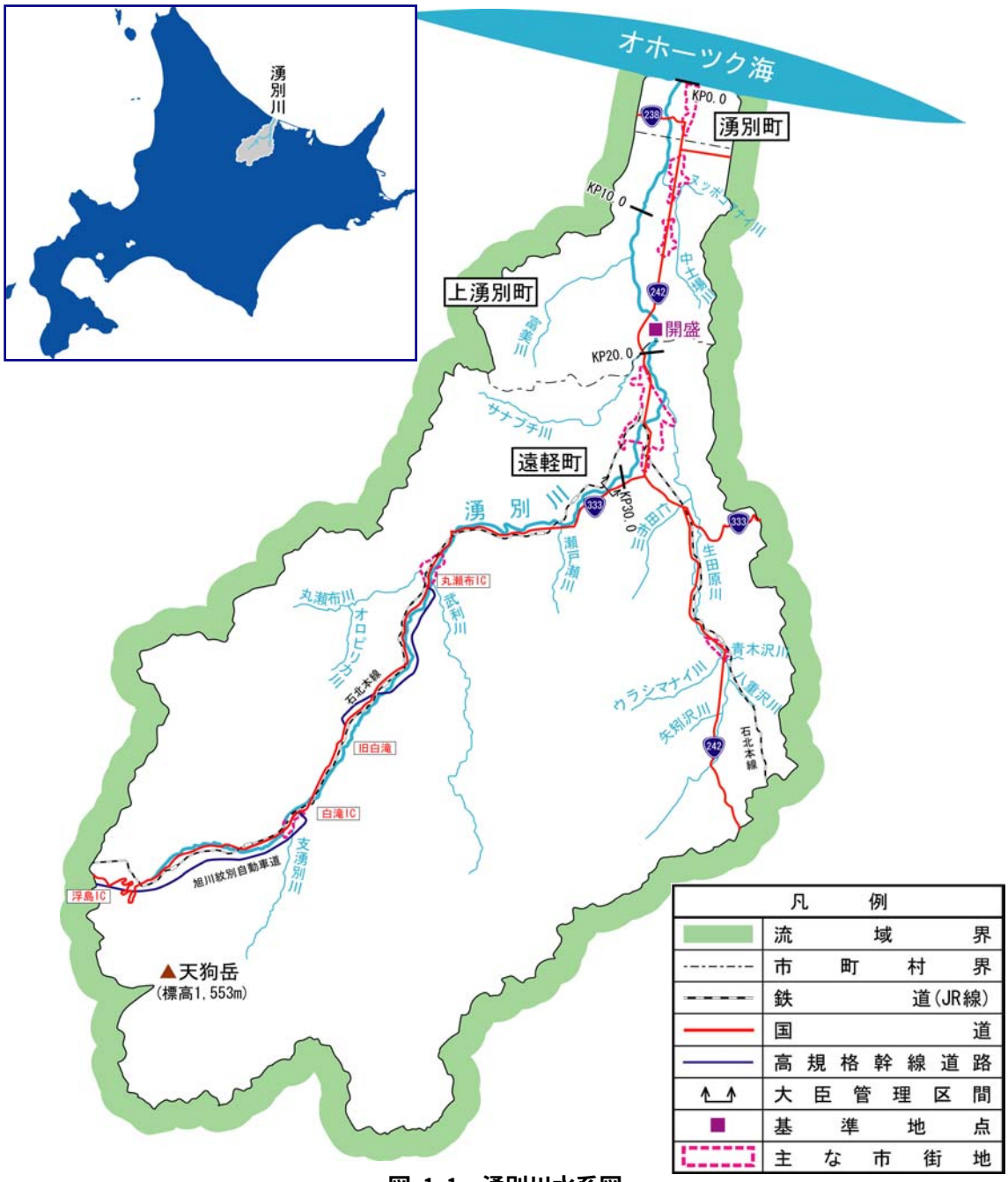


図 1-1　湧別川水系図

表 1-1　湧別川流域の概要

項目	諸元	備考
幹線流路延長	87km	全国 57位/109水系
流域面積	1,480km^2	全国 46位/109水系
流域自治体	湧別町、上湧別町、遠軽町	
流域内人口	3.5万人	
支川数	16	

1-2 地形

湧別川流域は、武利岳(1,876m)を最高峰として、北見富士(1,307m)、チトカニウシ山(1,446m)、天狗岳(1,635m)、平山(1,775m)、武華山(1,759m)に囲まれた流域で、西は石狩川水系、北は渚滑川水系、南は常呂川水系に接している。中～上流部は広い流域をもつが、下流部では幅が狭くなり、オホーツク海に面している。また、流域の大部分は山地、丘陵地であり、低地は山地の谷底平野と最下流部に分布するのみである。

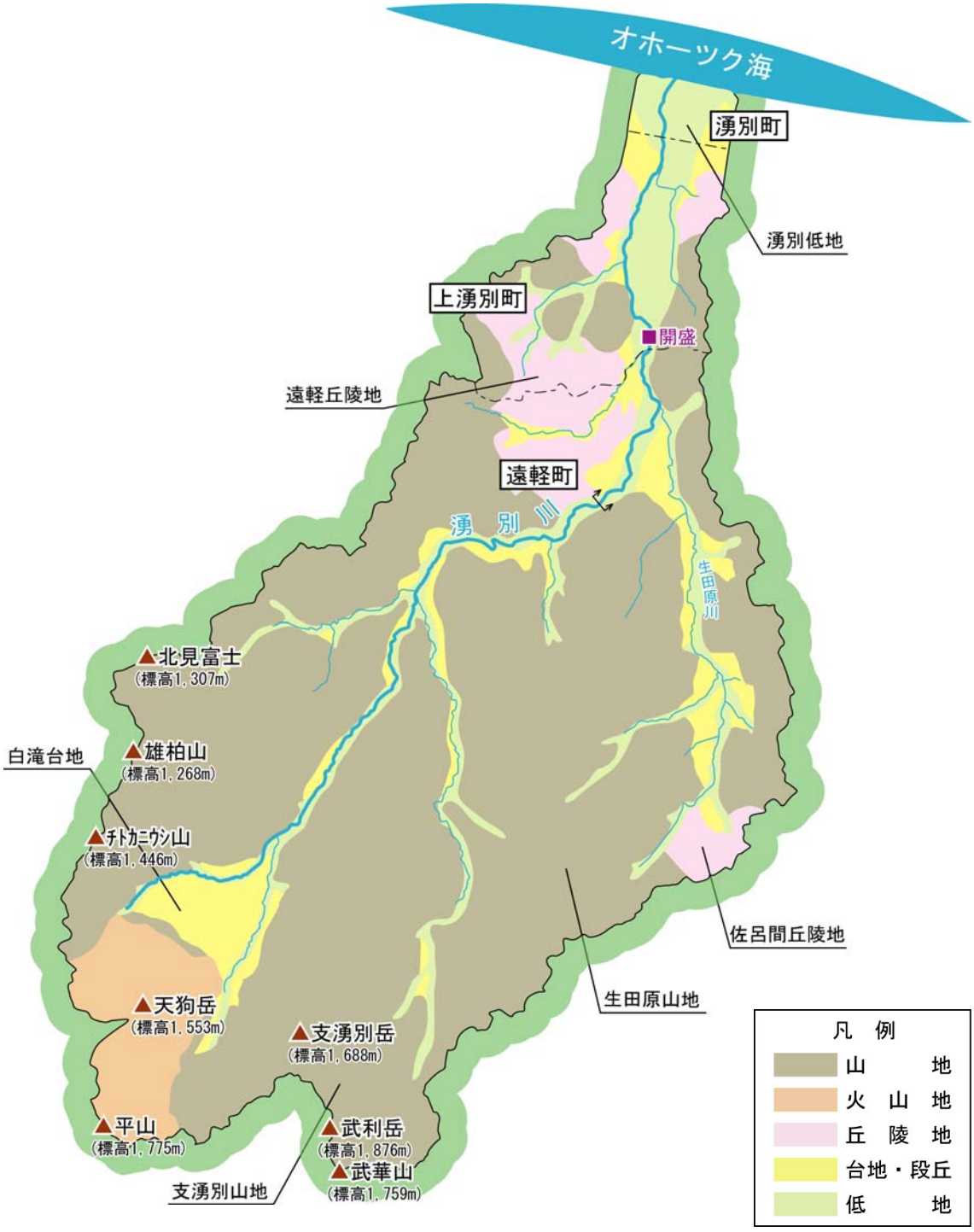
主な河川は湧別川、支湧別川、武利川、生田原川などで、丸瀬布から遠軽にいたる湧別原野付近で合流し、北北東に流下し、オホーツク海に注ぐ。

上流は、湧別川の左岸側および支湧別川の右岸側に雄柏山(1,268m)、支湧別岳(1,688m)などの急峻な大起伏山岳地形が広がり、この間に挟まれた三角状の盆地を形成する白滝周辺は、段丘面と周氷河性緩斜面とが発達し標高 500m 前後の火山灰台地(白滝台地)を形成している。

これより下流は、瀬戸瀬付近まで標高 500～800m の小起伏山地となっており、斜面の傾斜も急勾配である。

瀬戸瀬より下流および生田原川流域は、標高 200～300m の大起伏丘陵地(遠軽丘陵地、サロマ丘陵地)となり、山稜は比較的平坦で湧別原野と呼ばれている。

段丘、沖積層の分布する平坦地は、河川沿いに細長く分布するが、遠軽、上湧別でやや広くなり、湧別低地を形成する。海岸平野は、サロマ湖、シブノツナイ湖に挟まれた低地で、河口付近には湿地を形成する。



出典：国土庁土地局国土調査課　土地分類図
(北海道Ⅳ　網走支庁)　S53 年発行

図 1-2　地形分類図

1-3 地質

湧別川流域の地質は、中生代の堆積岩類を基盤とし、中流部では、これを覆って火山性の岩石を主体とした新第三系が広く分布する。地質構造上、本流域は“日高帯[*1]”に属し基盤岩や新第三系は、ほぼ南北方向の配列を示している。

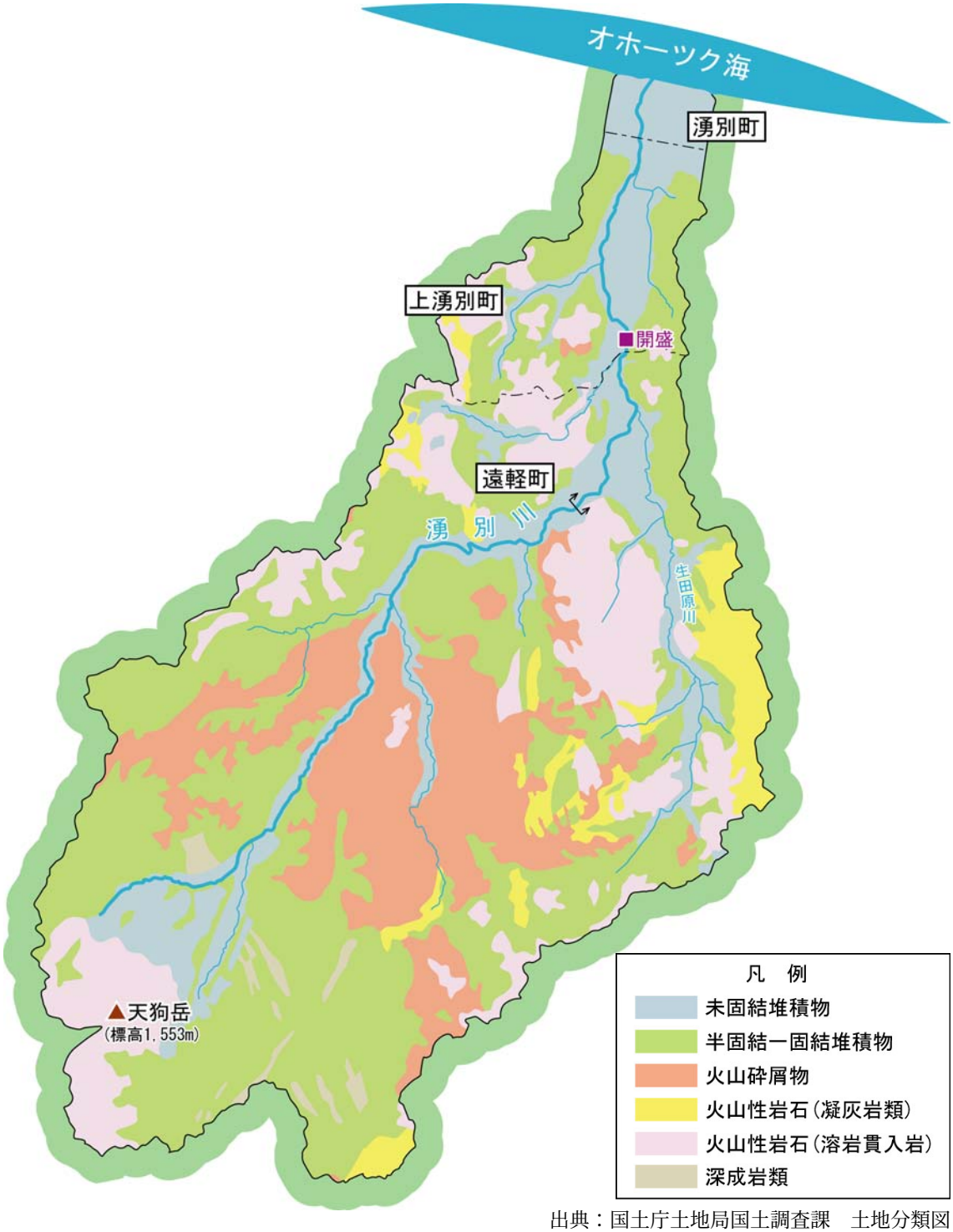
流域の上流部を占める中生層は日高累層群[*2]と呼ばれ、三畳紀～ジュラ紀の粘板岩、砂岩、チャート、塩基性凝灰岩などから構成される。この日高累層群中には、白亜紀ないし古第三紀に貫入した花崗閃緑岩の小岩体が点在する。一方、下流域に露出する中生層は、湧別層群と呼ばれ、砂岩・頁岩互層よりなる。

これらの基盤岩の間を埋めるように、中流部の遠軽から瀬戸瀬付近を横断して、いわゆる“グリーンタフ”地域が南北にのびている。このゾーンは、鴻の舞層群等、新第三紀中新世の凝灰質岩石の火山角礫岩と、これに伴われる流紋岩質・安山岩質・玄武岩質の熔岩・岩脈等を主体とし、砂岩･泥岩を含む。また、丸瀬布から武利川流域一体は、新第三紀鮮新世の溶結凝灰岩に覆われて、台地を形成している。この他、源流部の天狗岳周辺には、第四紀洪積世の安山岩質溶岩土等の火山岩類が分布し､その山麓に広がる崖錐斜面が白滝の台地を形成している。

河川沿いには、白滝の台地および生田原川の合流点付近より下流で、礫･砂からなる河岸段丘が発達している。海岸平野には、礫･砂･粘土の他、一部で泥炭も見られる。

[*1] 北海道の地質構造は、ほぼ南北に帯状配列したおり、大きく「西部北海道」、「中央部北海道」、「東部北海道」に分けられる。このうち「中央部北海道」の中軸帯を、西から“神居澤構造帯”、“日高帯”、“常呂帯”と呼んでいる。

[*2] 中央部北海道の基盤を構成する白亜紀以前の地層は、総括して“日高累層群”と呼ばれ、中生層と考えられてきた。その後、二畳紀の化石が発見され、一部は古生代にさかのぼることが明らかになってきているが、なお時代未詳である。



出典：国土庁土地局国土調査課　土地分類図
(北海道Ⅳ　網走支庁)　S53 年発行

図 1-3　地層地質分布図

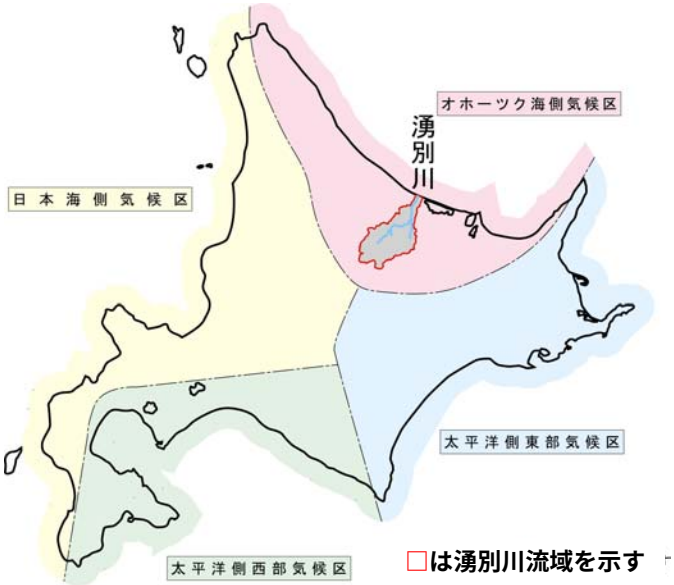
1-4 気候・気象

流域はオホーツク海型気候区に属する。オホーツク沿岸は、梅雨や台風の影響受けることが少なく道内では温和な気候と伝えられる。

湧別川流域の平均気温は、北海道内の気温に比べて若干低く、夏期でも月平均 20℃前後と冷涼である。特徴として、5 月から 9 月まではオホーツク海高気圧による低温を除いては比較的温和であるが、夏期にはフェーン現象がおこりやすく猛暑に見舞われることがある。秋冬にかけては雨量も少なく、晴天乾燥の日が多く続く。冬季は、北西の季節風と流氷の影響を受け、氷点下 20 度を越える日もある。

北海道の降水量は一般に日本海側に多く、次いで太平洋側、オホーツク海側の順に少なくなる。降水量の特に多いのは天塩から暑寒別に至る山系、支笏湖を中心とする西胆振、および道南の後志山岳地帯で、ともに年間 1,800㎜ 以上に達する。また、少ない地方はオホーツク海沿岸で年間約 800㎜ 程度であり、湧別川流域についても概ね 800㎜ 程度である。

網走地方の降雨型は、移動性低気圧による前線性の降雨が多く 8～9 月に集中している。



出典：「北海道の気候」を基に作成

図 1-4　気候区分図

図 1-5　流域の年間降雨量分布図

(1977～2006 年の 30 年間)

表 1-2　各気象観測値

項目	中湧別地点 [湧別(気)観測所]	遠軽地点 [遠軽(気)観測所]	白滝地点 [白滝(気)観測所]	北海道平均
データ期間	1977年～ 2006年	1977年～ 2006年	1977年～ 2006年	1977年～ 2006年
平均気温(℃)	5.8	5.7	4.8	7.4
最高気温(℃)	32.7	33.7	31.5	30.1
最低気温(℃)	-22.1	-24.6	-25.0	-16.2
平均風速(m/s)	3.1	1.7	2.0	3.6
最大風速(m/s)	10.5	7.6	7.3	12.1
日照時間(hr)	1,968	1,864	1,676	1,834
降水量(㎜)	774	852	872	1,120

※1 出典：気象庁アメダス
※2 降水量の中湧別、遠軽、白滝観測所は、1987～2006年のデータを使用した
※3 全道平均の値は1977～2006年の各支庁所在地のデータを平均したもの

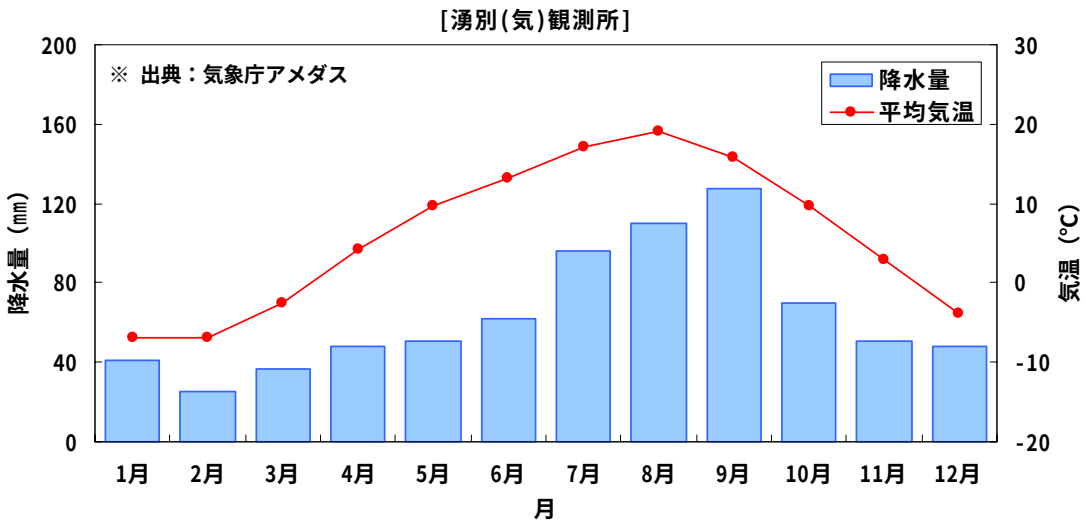


図 1-6　中湧別地点の降水量と平均気温[過去 20 カ年(1987～2006)の平均]

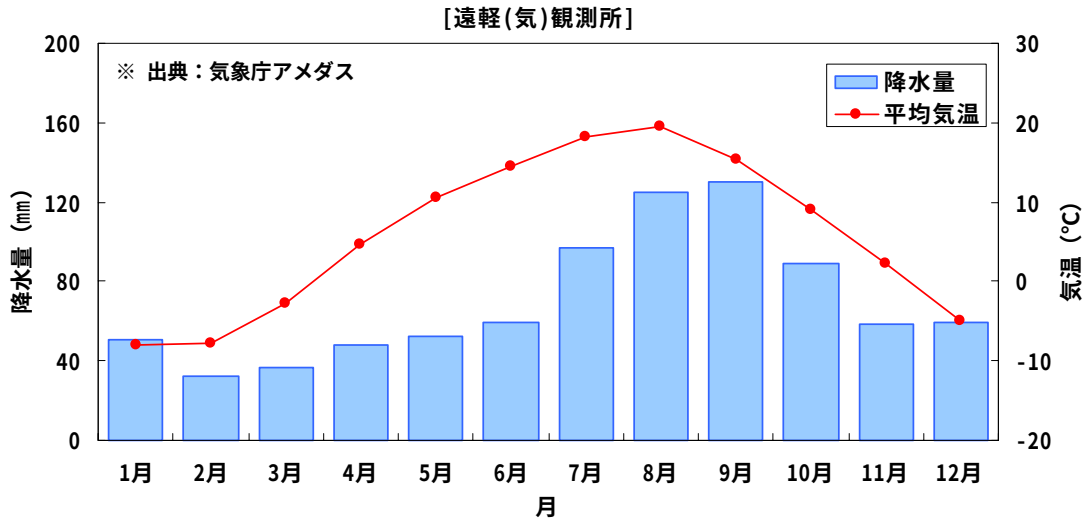


図 1-7　遠軽地点の降水量と平均気温[過去 20 カ年(1987～2006)の平均]

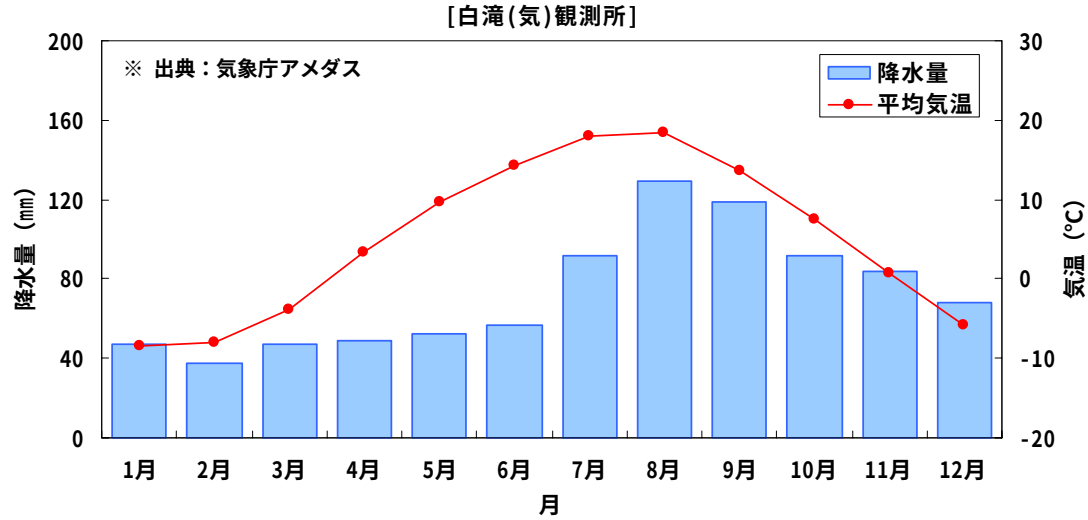
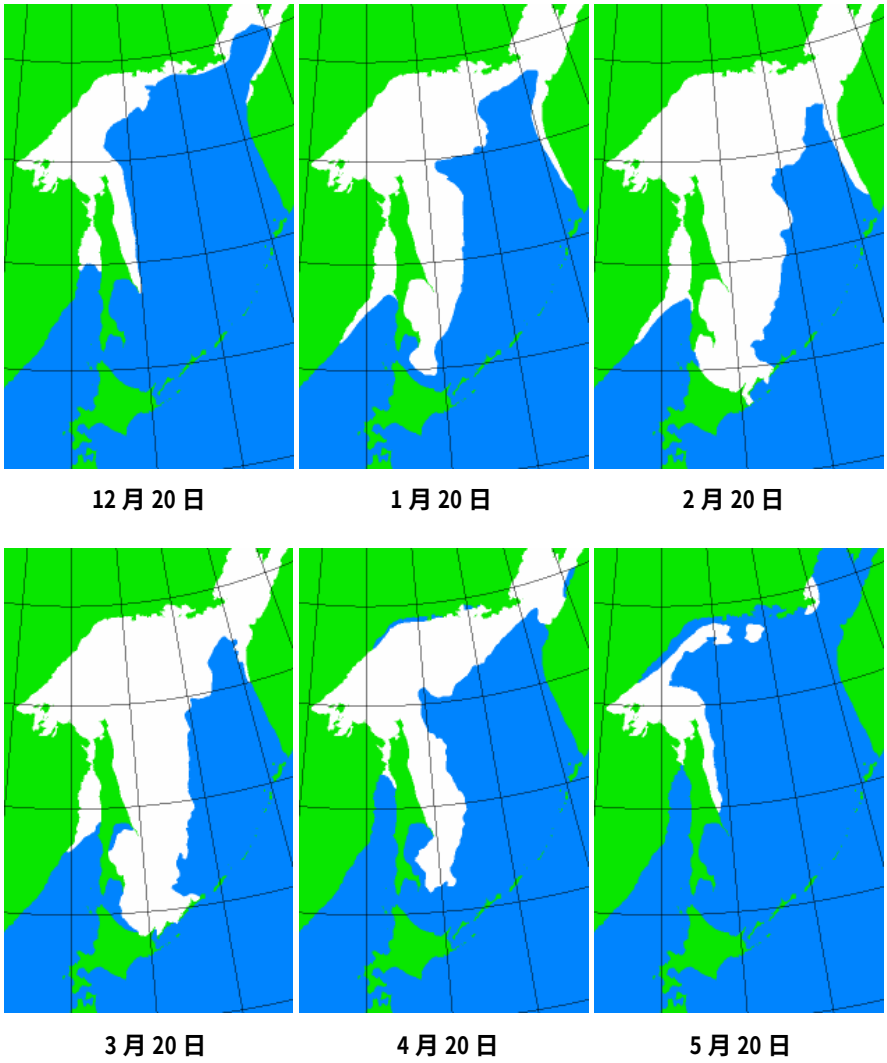


図 1-8　白滝地点の降水量と平均気温[過去 20 カ年(1987～2006)の平均]

1-5 オホーツク海の流氷

1) オホーツク海の流氷概要

オホーツク海は、日本周辺で冬季に流氷が毎年見られる唯一の海である。例年 11 月初めに、オホーツク海の北部から凍り始め、その後次第に南方に広がり、流氷となって南下し、1 月中旬には北海道沿岸に到来する。2 月から 3 月にかけてオホーツク海の流氷域は最も広がり、オホーツク海の約 80%が流氷に覆われる。そして流氷は太平洋と日本海にしばしば流出する。4 月になると北海道沿岸の流氷は沖合いに去り、7 月はじめ頃オホーツク海の流氷は融けて無くなる。



出典：気象庁 HP「海氷観測資料」

図 1-9　流氷の平年分布図（1971～2000 の 30 ヵ年平年）

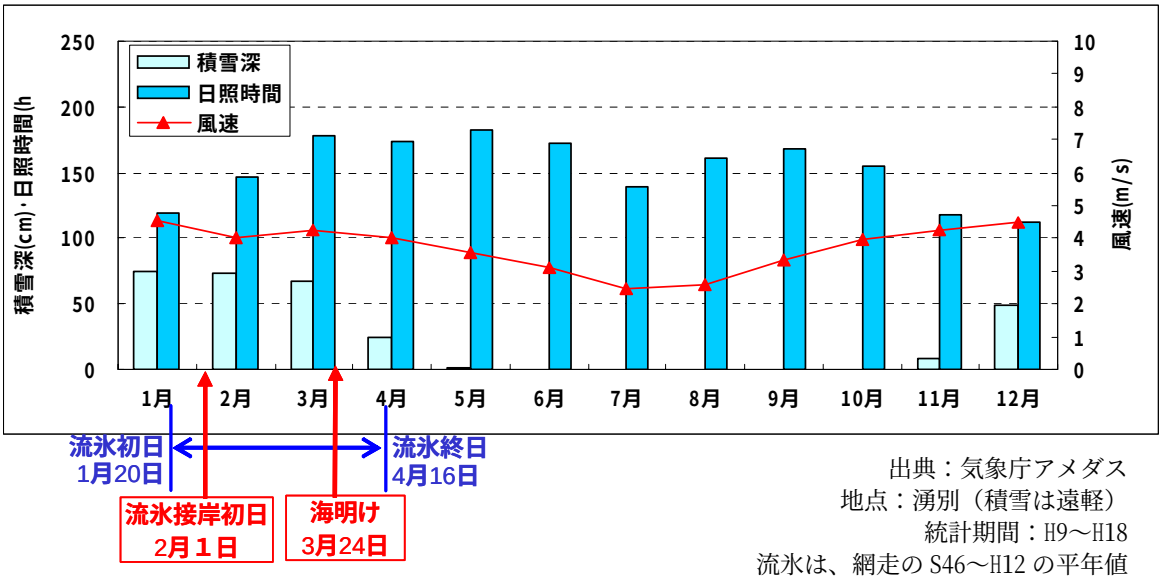
2) 流氷と気象の関係

海面が流氷に覆われていると海面からの水蒸気補給が無くなるため雲が発生しにくくなり、日照時間が長くなる。

海面が凍っていなければ海水温は-2 度以上あり、沿岸付近の気温は内陸ほど低くならないが、流氷が接岸すると海水の熱が大気に伝わらなくなるため気温が低くなる。

流氷の表面の放射冷却は内陸と同じように起き、また、海側から吹いてくる風も暖められないため気温が低くなる。

流氷面は地面･海水面に比べ太陽光をより多く反射し太陽エネルギーを吸収しにくいため暖まりにくいため、他の地方では 1 月末に最低となって 2 月に入ると昇温するのに対し、オホーツク海沿岸では鍋底のように 2 月半ばまで低温が続く。



出典：気象庁アメダス
地点：湧別（積雪は遠軽）
統計期間：H9～H18
流氷は、網走の S46～H12 の平年値

※注釈）　流氷初日：　視界外の海域から漂流してきた流氷が視界内の海面に初めて現れた日
流氷接岸初日：　流氷が接岸または定着氷と接着して沿岸水路がなくなり船舶が航行できなくなった最初の日
海明け：　海岸からの視界内の流氷の密接度が半分以下（全氷量が 5 以下）になり、沿岸に水路ができて船舶の航行が可能になった最初の日
流氷終日：　視界内の海面で流氷が見られた最後の日

図 1-10　流氷と気象(風速・日照時間・積雪深)との関係

2.流域及び河川の自然環境

2-1 流域の自然環境

2-1-1 植生

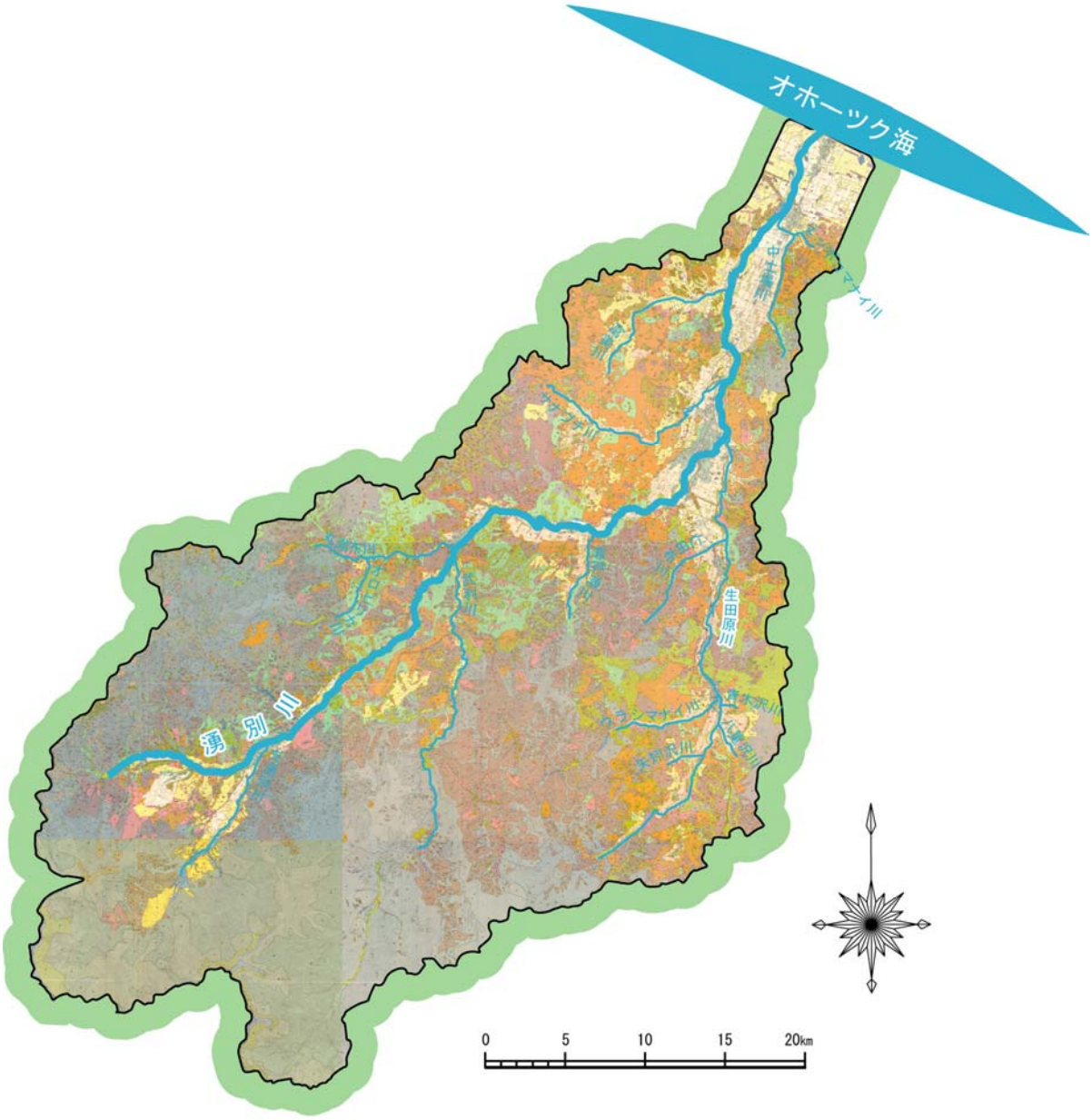
流域の大部分は山地、丘陵地であり、低地は山地の谷底平野と最下流部に分布する。

流域の源流部に位置する天狗岳周辺では、エゾマツ-トドマツ群集やエゾマツ-ダケカンバ群落等の亜寒帯、亜高山帯自然植生が広がる。上流部から中流部の丘陵地ではミズナラ-カシワ-コナラ群落等が分布しているが、トドマツや落葉針葉樹の植林もみられる。河畔林は源流部から上流域ではエゾマツ、トドマツ等の針葉樹林、ミズナラ、エゾイタヤ等の混生した針広混交林が分布し、低地の平野部ではヤチダモ-ハルニレ群集が分布している。中流部から下流部の河岸にはヤナギ低木林が分布している。

写真 2-1　ヤチダモ-ハルニレ群集

写真 2-2　ミズナラ群落

出典：北海道開発局



II. 亜寒帯，亜高山帯自然植生
Natural Vegetation in Vaccinio-Piceetea Region

- 18 エゾマツートドマツ群集 Picea jezoensis-Abies sachalinensis association
- 19 エゾマツーダケカンバ群落 Picea jezoensis-Betula ermanii community
- 22 エゾマツーダケカンバ群落 Picea jezoensis-Betula ermanii community

III. 亜寒帯，亜高山帯代償植生
Substitutional Communities in Vaccinio-Piceetea Region

- 32 ササ群落 Sasa spp. community
- 33, 35 33 伐跡群落 Plant communities in clear-cut area; 35 伐採跡地に成立した二次林 Substitution forest in clear-cut area
- 34 ダケカンバ群落 Betula ermanii community

IV. ブナクラス域自然植生
Natural Vegetation in Fagetea crenatae Region

- 39 下部針広混交林 Picea jezoensis, Abies sachalinensis-Quercus mongolica var. grosseserrata. Tilia japonica, Acer mono forest
- 30
- 42, 43 42 エゾイタヤーシナノキ群落 Acer mono var. glabrum-Tilia japonica community; 43 ミズナラ群落 Quercus mongolica var. grosseserrata community

V. ブナクラス域代償植生
Substitutional Communities in Fagetea crenatae Region

- 70 シラカンバーササ群落 Sasa spp. -Betula tauschii community

IX. 植林地，耕作地植生（各クラス域共通）
Plantation and Cultural Land

- 94 牧草地 Cultivated meadow
- 101 トドマツ植林 Abies sachalinensis plantation
- 110 畑地 Field
- 110
- 112 牧草地 Cultivated meadow

図 2-1　湧別川植生図

出典：環境省自然環境保全基礎調査

2-1-2 哺乳類

湧別川流域に生息する哺乳類は、平成 15 年度の河川水辺の国勢調査によると、オオアシトガリネズミ、エゾヤチネズミ、エゾアカネズミ、キタキツネ、エゾシカ等の 8 科 15 種が報告されている。特にオオアシトガリネズミ、エゾヤチネズミが多く生息しており、河川敷の草地環境がトガリネズミ類、ネズミ類の生息環境となっている他、中流部の山付き区間ではエゾアカネズミ、エゾリス、エゾモモンガ、エゾシカ等の森林性の種が確認されている。

特定種は、カラフトアカネズミの 1 種が確認されている。

写真 2-3　カラフトアカネズミ

写真 2-4　キタキツネ

出典：北海道開発局

2-1-3 鳥類

湧別川流域に生息する鳥類は、平成 14 年度の河川水辺の国勢調査によると、94 種の鳥類が報告されている。

生息環境別では、海辺鳥類は、ウミウ、ウミアイサ、オオセグロカモメ、ウミネコ等が確認され、河口付近はカモ類、カモメ類の集団越冬地、休息地となっている。水辺鳥類は、アオサギ、マガモ、コガモ、ホオジロガモ、カワアイサ等であり、河岸の崖はショウドウツバメの集団営巣地となっている。草原性鳥類は、ヒバリ、ノビタキ、コヨシキリ、オオジュリン等であり、橋桁がイワツバメの集団営巣地となっている。森林性鳥類は、アカハラ、キビタキ、アカゲラ、センダイムシクイ、シジュウカラ等であり、中・上流域の山付き区間に多く生息している。

特定種は、オジロワシ、オオワシ、オオタカ、ハイタカ、ヒシクイ、クマゲラ、ミコアイサ、オシドリ、オオジシギ、コアカゲラの 10 種が確認されている。

写真 2-5　オジロワシ

写真 2-6　オシドリ

出典：北海道開発局

2-1-4 両生類・爬虫類

湧別川流域に生息する両生類・爬虫類は、平成 15 年度の河川水辺の国勢調査によると、両生類はエゾサンショウウオ、アマガエル、エゾアカガエルの 3 科 3 種、爬虫類はシマヘビの 1 科 1 種が報告されている。特にエゾアカガエルは全区間で卵塊、幼生が確認されており、止水域や水溜りが繁殖場所となっていると考えられる。また、ヘビ類の餌となるカエル類やネズミ類が多く生息しており、ヘビ類の採餌環境に適した河川環境となっていると考えられる。

特定種は、山付き斜面部の林床の止水域等でエゾサンショウウオが非常に多くの卵塊と共に確認されており、これらの箇所が安定した繁殖場所となっていると考えられる。

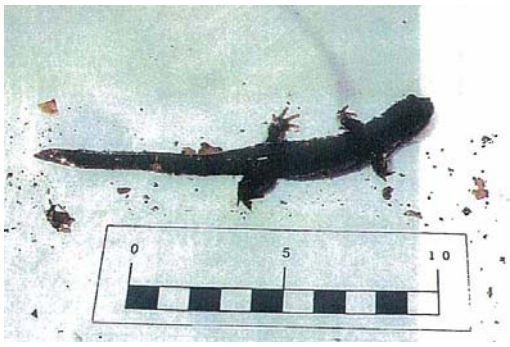


写真 2-7　エゾサンショウウオ

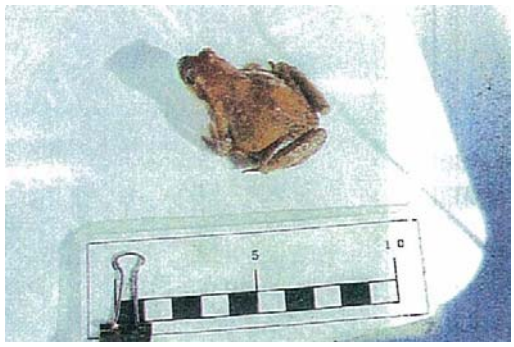


写真 2-8　エゾアカネズミ

出典：北海道開発局

2-1-5 魚類

湧別川に生息する魚類は、平成 16 年度の河川水辺の国勢調査によると、ヤツメウナギ科、コイ科、ドジョウ科、サケ科、トゲウオ科、カジカ科、ハゼ科及びカレイ科の 8 科 25 種が報告されている。純淡水魚は、シベリアヤツメ、エゾウグイ、フクドジョウ、ニジマス、ヤマメ、エゾイワナ、オショロコマ、トミヨ、エゾトミヨ、ハナカジカ、ジュズカケハゼの 11 種が、回遊魚は、カワヤツメ、マルタ、ウグイ、サケ、カラフトマス、サクラマス、イトヨ日本海型、エゾハナカジカ、シマウキゴリ、ウキゴリ、トウヨシノボリ、ヌマチチブの 12 種で、汽水・海水魚はアシシロハゼ、ヌマガレイの 2 種が確認されている。

特定種は、シベリアヤツメ、マルタ、エゾウグイ、サクラマス（ヤマメ）、オショロコマ、イトヨ日本海型、エゾトミヨ、ハナカジカ、エゾハナカジカの 9 種が確認されている。

写真 2-9　シベリアヤツメ

写真 2-10　サクラマス(ヤマメ)

出典：北海道開発局

2-1-6 昆虫類等

湧別川流域に生息する昆虫類は、平成 17 年度の河川水辺の国勢調査によると、クモ類 3 目 13 科 72 種、昆虫類 11 目 153 科 643 種、合計 715 種が報告されている。高水敷が広く牧草地として利用されている下流部では、他地区と比較してトンボ目とハエ目が多く確認されている。ヤナギ等の河畔林やオオイタドリを中心とした草本群落、さらには山付き区間を含む中流域では、チョウ目、コウチュウ目が優先しており、ヒメシジミ、カバイロシジミ、エゾヒメシロチョウ、チャマダラセセリ等の草地に生息するチョウ類が確認されており、河川敷はこれらのチョウ類にとって重要な生息環境となっていると考えられる。また、高水敷を公園利用されている上流域ではカメムシ目が多く確認されている。

特定種は、ナツアカネ、チャマダラセセリ、キタシリアカニクバエ、ミズマムシの 4 種が確認されている。

写真 2-11　ナツアカネ

写真 2-12　チャマダラセセリ

出典：北海道開発局

重要な種および着目すべき種(湧別川)

区分	№	種名	重要種指定区分				緑の国勢調査
			文化財保護法	種の保存法	環境省レッドデータブック	北海道レッドデータブック	
魚類	1	シベリアヤツメ			NT	R	
	2	ヤチウグイ			NT		
	3	マルタ				N	
	4	エゾウグイ				N	
	5	シラウオ				R	
	6	サクラマス				N	
	7	ヤマメ				N	
	8	イトヨ日本海型				N	選定
	9	トミヨ					選定
	10	エゾトミヨ			NT	R	選定
	11	ハナカジカ				N	
	12	エゾハナカジカ				N	
	13	ルリヨシノボリ				R	
底生動物	1	コシダカヒメモノアラガイ			DD		
	2	モノアラガイ			NT		
	3	ゴカイ					
	4	ウエノヒラタカゲロウ					
	5	フタスジモンカゲロウ					
	6	オオコオイムシ				R	
	7	カラフトゴマフトビケラ				R	
	8	ウルマーシマトビケラ					
	9	キボシツブゲンゴロウ			NT	R	
	10	ハセガワドロムシ				R	
植物	1	エゾノミズタデ				Vu	貴重
	2	ヤマタニタデ			VU		
	3	ノダイオウ			VU		
	4	エゾノミヤマハコベ			VU		
	5	キタミフクジュソウ			VU	Vu	
	6	バイカモ				R	
	7	チドリケマン			NT		
	8	ムラサキベンケイソウ			DD		
	9	カラフトイバラ				R	
	10	ホザキシモツケ			VU		
	11	カラフトモメンヅル			VU	R	
	12	サワゼリ			EN		
	13	ホソバツルリンドウ			EN		
	14	エゾキヌタソウ			VU		
	15	エゾムグラ			VU	R	
	16	ホロマンノコギリソウ			VU		
	17	イトモ			VU		
	18	クロユリ				R	
	19	シラオイエンレイソウ			CR		
	20	ヒメウキガヤ				R	
	21	ミクリ			NT	R	
	22	アカンカサスゲ				R	
	23	ウスイロスゲ			VU		
	24	イトヒキスゲ			EN		
	25	エゾハリスゲ			VU		
	26	ヒロハトンボソウ			EN		
鳥類	1	ハジロカイツブリ					
	2	アオサギ					
	3	ヒシクイ	天		VU	R	
	4	コハクチョウ				R	
	5	オシドリ				R	
	6	マガモ					
	7	ミコアイサ				Vu	
	8	オジロワシ	天	国内	EN	En	主要･稀少
	9	オオワシ	天	国内	VU	En	主要
	10	オオタカ		国内	VU	Vu	稀少
	11	ハイタカ			NT	Vu	
	12	ケアシノスリ				R	
	13	オオジシギ			NT	R	主要
	14	カワセミ					主要
	15	クマゲラ	天		VU	Vu	主要･稀少
	16	コアカゲラ				R	稀少
	17	イワツバメ					
	18	キセキレイ					
	19	アカモズ			NT	R	
	20	カワガラス					
	21	ウグイス					
	22	コヨシキリ					

重要な種および着目すべき種(湧別川)

区分	№	種名	重要種指定区分				緑の国勢調査
			文化財保護法	種の保存法	環境省レッドデータブック	北海道レッドデータブック	
両生類	1	エゾサンショウウオ				N	主要
	2	アマガエル					
	3	エゾアカガエル					
爬虫類	1	シマヘビ					
哺乳類	1	エゾリス					
	2	エゾモモンガ					主要
	3	カラフトアカネズミ				N	
	4	キタキツネ					
	5	Martes属の一種			クロテン：DD		クロテン：主要
	6	イイズナ					
	7	ミンク					
陸上昆虫類	1	エゾアオイトトンボ					特定
	2	ナツアカネ				R	
	3	エゾアカネ				R	
	4	ヒメアカネ				R	
	5	ヒメリスアカネ				R	自然
	6	サッポロウンカ				R	
	7	クロスジコアオカスミカメ			DD	R	
	8	ナナホシクサカゲロウ				R	
	9	キタコエグリトビケラ				R	
	10	カラフトタカネキマダラセセリ					自然・特定
	11	チャマダラセセリ			CR+EN		特定
	12	カバイロシジミ					主要・特定
	13	シロオビヒメヒカゲ北海道東部亜種					自然・特定
	14	キタシリアカニクバエ				R	
	15	エゾアオゴミムシ				R	
	16	キタマルクビゴミムシ				R	
	17	ミズスマシ				R	

出典：河川水辺の国勢調査（H3～H17）

重要種指定区分

【文化財保護法】

文化財保護法(昭和25年法律第214号)

天：天然記念物

【種の保存法】

絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(平成4年法律第75号)

国内：国内希少野生動植物種

【環境省RDB】

改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－

（環境省．魚類2003、底生動物2005,2006、植物・鳥類・両爬哺2002、昆虫2006）

CR+EN：絶滅危惧I類

CR：絶滅危惧IA類

EN：絶滅危惧IB類

VU：絶滅危惧II類

NT：準絶滅危惧

DD：情報不足

【北海道RDB】

北海道レッドデータブック（北海道．2001）

Cr：絶滅危機種

En：絶滅危惧種

Vu：絶滅危急種

R：希少種

N：留意種

緑の国勢調査は参考資料とした

【緑の国勢調査】

主要：主要野生動物［第1回自然環境保全調査（環境庁．1976）］

自然：すぐれた自然の調査対象種［第1回自然環境保全調査（環境庁．1976）］

貴重：貴重植物[第1回自然環境保全調査（環境庁.1976)]

指標：指標昆虫［第2回自然環境保全基礎調査（環境庁．1980）］

選定：調査対象種［第2回自然環境保全基礎調査（環境庁．1980）］

稀少：稀少種［第2回自然環境保全基礎調査（環境庁．1983）］

2-2 河川及びその周辺の自然環境

1) 上流部（源流部～武利川合流点付近）

源流部から武利川合流点に至る上流部は、その源を北見山地の天狗岳(標高 1,561m)に発し、山間部の遠軽町白滝を流れ、丸瀬布地区まで渓谷を貫流する。河床勾配は 1/100 以上の急勾配であり、渓流河川の様相を呈している。周囲はエゾマツ、トドマツの針葉樹林、ミズナラ、エゾイタヤ等の混生する針広混交林が広く分布している。山間部を抜けた区間では、明瞭な瀬・淵や部分的に岩河床が露出している箇所もみられ、流れの多様な河川環境を形成し、ハナカジカやオショロコマ等が生息している。

写真 2-13　湧別川源流部

（写真出典：網走開発建設部 HP）

2) 中流部（武利川合流点付近～生田原川合流点付近）

武利川合流点から生田原川合流点に至る中流部は、河床勾配が約 1/250 程度であり、河道は蛇行を繰り返し中州や寄州が発達しているとともに、瀬･淵が明瞭な河川の様相を呈している。

河川は、サケ、カラフトマス等が遡上してくる他、シベリアヤツメ、エゾトミヨ等が生息している。また、マガモ、コガモ等のカモ類の休息場となっている。河川周辺の山付林には、ヤナギ林のほか、ヤチダモ、ハルニレ林が分布している。高水敷は湿性草本群落が分布しているほか、遠軽市街地では公園等が整備され、イベントやスポーツ等に利用されており、地域住民の憩いの場となっている。

写真 2-14　湧別川中流部（KP26.0 付近）

3) 下流部（生田原川合流点付近～河口）

生田原川合流点付近から河口に至る下流部は、河床勾配が約 1/300～1/500 程度であり、河口付近の一部が約 1/800 となっており、全川を通じて比較的急勾配である。

河道は蛇行を繰り返しながら畑地帯を流下しており、砂礫の中州等が見られ、エゾウグイやカラフトマス、ハナカジカ等が生息している。周囲は山付きと畑地が左右岸交互に見られ、オジロワシ、オオワシ、クマゲラ等の鳥類のほか、河畔林内の水溜り等がエゾサンショウウオやエゾアカガエルの産卵場所となっている。

また、河口付近は比較的緩勾配で、河道は大きく蛇行し、ワンドや細流、瀬・淵等の多様な河川環境を形成している。この区間には感潮区間があり、マルタウグイやエゾハナカジカ等の感潮域に生息する魚類の生息地になっており、河口付近の緩やかな流れは、ヒシクイ、オシドリ等のガン・カモ類やカモメ類の越冬地及び渡りの中継地として利用されている。また、河口部左岸の砂丘地には、ハマニンニクやハマナスの砂丘植生が生育している。

写真 2-15　湧別川下流域（KP16.0 付近）

写真 2-16　湧別川下流域（KP 4.0 付近）

2-3 特徴的な河川景観や文化財等

2-3-1 景観・景勝地

流域の上流域では、湧別川渓谷等の渓流景観を始めとした自然景観に恵まれているとともに、支流の丸瀬布川は 2km の間に 13 もの滝が階段状に並んでいる「十三の滝」、武利川にはエゾシカの生息地としても知られる「鹿鳴の滝」、白滝村の湧別川本川には、「村名発祥の滝」など、随所に点在する滝が変化に富む景観を形成している。また、白滝温泉、瀬戸瀬温泉等ののどかな自然に包まれた温泉地が点在している。

中流域には、発電ダムである湧別川ダムの周囲には寒河江（さがえ）公園があり、水、樹々、そして動物や鳥たちと人々がふれあう静かな空間を作り出している。また、遠軽町内には北海道自然 100 選にも選ばれた、地上約 78m にそびえる瞰望（がんぼう）岩があり、この巨大なシンボルを中心に桜やつつじの咲く背後の丘陵をそのまま利用した大規模な太陽の丘えんがる公園があり、そこからは遠軽市街を流れる湧別川を望むこともできる。

下流域は、瀬と淵を形成し緩やかに流れ広い高水敷を利用したパークゴルフ場が点在する。

写真 2-17　鹿鳴の滝

写真 2-18　十三の滝

写真 2-19　ひらやま

写真 2-20　瞰望岩

（出典：遠軽町役場ホームページ）

表 2-1　主な観光対象(1)

項目	市町村名	名称	内容
自然	上湧別町	チューリップ公園	国道242号線沿いに広がるチューリップ公園には、町の花であるチューリップが120万本も咲いている。総面積7haの花畑にはオックスフォード、ショウウイナーなど珍しい品種がある。
	上湧別町	五鹿山公園	五鹿山を取り巻く樹齢90年の桜や7000本のツツジが咲き誇る、自然環境に恵まれた五鹿山公園。春には福寿草やミズバショウ、夏にはキャンプ、秋は紅葉、冬はスキーと四季折々に楽しめる公園。キャンプ施設の充実度は高く、フリーテントサイトやオートキャンプ場のほか、ログキャビンも完備。アウトドアシーズンには道東観光のベースキャンプとして多くのキャンパーが訪れる。また、園内には150種もの貴重な高山植物を鑑賞できるロックガーデンや子供に人気の木製遊具、パークゴルフ場などもあり、家族揃って楽しめる公園。
	遠軽町	瞰望岩（がんぼういわ）	瞰望岩（がんぼういわ）は、アイヌ語で「インガルシ」見晴らしの良いところという意味。えんがるの町名はこの言葉に由来するほど、瞰望岩は町のシンボル的な存在。
	遠軽町	太陽の丘えんがる公園	太陽の丘えんがる公園は、ひとつの丘の頂から裾野までをそっくり生かし、色鮮やかな花々で埋め尽くされる広大な公園。夏から秋にかけては、黄花コスモスや混合コスモスなど1,000万本ものコスモス、春から初夏にかけては、淡い薄紅色の芝ざくらやつつじが咲き誇る。園内には、景勝地やレストハウス、ゴーカートなどの遊具施設のある「こどもの国」やキャンプ場もあり、町民をはじめ多くの皆さんの憩いの場として利用されている。
	遠軽町	せせらぎ広場	湧別川にかかる遠軽橋（国道242号線）のふもとに、湧別川に寄り沿うように作られている公園。
	遠軽町	福路ひまわり園　SUN-BA（さんば）	1.2ヘクタールの土地に様々な種類のひまわりが植えられている。
	遠軽町	薬師山	瀬戸瀬方面にそびえる薬師山は、標高373m。登山道の全長は2,590mと、ハイキングなど、気軽に登山ができる。道中には、88カ所のお地蔵さまがある。
	遠軽町	寒河江公園	大正3年、寒河江地区で鉱泉が発見され、同8年から昭和20年頃まで瀬戸瀬鉱泉浴場として営業されていた。 山が北にあり、南は貯水池に面して春秋の季節には来訪者、各種団体の観桜会、観楓会等に多く利用され、風光明媚な場所として知られている。
	遠軽町 (丸瀬布)	大平高原	ぐるっと360°のパノラマが広がる高原で、日中の景観は勿論、お勧めは遮る物も、余計な明かりも無い夏の星空。
	遠軽町 (丸瀬布)	山彦の滝	丸瀬布市街から上武利方面に16kmのところにあり、さらに駐車場から200mの山道を上ると、高さ28mから流れ落ちる滝が姿を現す。裏側に回っても見られることから別名「裏見の滝」とも呼ばれている。
	遠軽町 (丸瀬布)	鹿鳴の滝	滑らかな岩肌をすべるように流れ落ちる滝で、周辺に鹿が多く生息し水を飲みに来ることから、この名前が付けられた。
	遠軽町 (丸瀬布)	十三の滝	丸瀬布市街から上丸方面へ18km、途中から8kmの林道が続く。総距離2,258m、標高差272mの間に「一の滝」から「十三の滝」が、次々と姿を現す。「十三の滝」までは往復5時間ほどの行程。
	遠軽町 (丸瀬布)	武利岳	網走管内最高峰1,876mの秀峰。かつてピンネシリ（男山）と呼ばれ8号目を過ぎるとゴツゴツした岩肌が現われ、起伏に富んだ尾根が山頂まで続き、小さく可憐な高山植物が一面に咲き乱れる。
	遠軽町 (丸瀬布)	藤　園	丸瀬布市街の高台に広がる花の名所。弘政寺から平和山公園にかけて、総延長1kmの藤棚に200株の藤が花をつける。花をつける6月初旬には、藤まつりが開催される。
	遠軽町 (丸瀬布)	奇城岩	丸瀬布市街から上丸方面へ18km、十三の滝へ向かう林道を5.7kmほど入ったあたりで後ろを振り返ると大きな姿を現す。昭和29年、十三の滝踏査の際に、「奇城岩」と立木に墨書きされていたのが名前の由来。
	遠軽町 (白滝)	黒曜石の露頭	湧別川流域の段丘に位置する白滝遺跡群は、今から2万年前の石器が生活の主な道具としていた時代の遺跡で、この白滝地域からはこれまでに100ヶ所以上から発見されている。東洋最大ともいわれる黒曜石の原産地であったため石器製作を行った大規模な遺跡が多く所在しているからであり、1つの遺跡からでも数十万点にも及ぶ遺物が出土する。
	遠軽町 (白滝)	村名発祥の滝	湧別川本川の国道333号線そばにある滝で、白く水しぶきを上げる姿から村名が「白滝」と命名されたとされる。
温泉	上湧別町	かみゆうべつ温泉「チューリップの湯」	チューリップのまち上湧別町初の日帰り入浴温泉施設。施設内にはレストラン「アルクマール」、道の駅「かみゆうべつ温泉チューリップの湯」も併設。
	遠軽町	瀬戸瀬温泉	市街から車で20分、緑深い原生林に囲まれた山間の出湯。
	遠軽町 (丸瀬布)	日帰り温泉　やまびこ	丸瀬布市街から上武利方面へ9km、森林公園いこいの森のすぐそばにある日帰り温泉施設。和風（木の湯）・洋風（山の湯）あわせて10種類の入浴が日替わりで楽しめる。
	遠軽町 (白滝)	白滝温泉	湧別川河畔に湧き出したひそやかな温泉。周囲は樹木に覆われ静かで、宿の前は桜や白樺の美しい森。北大雪スキー場の基地でもある。
	遠軽町 (白滝)	ひらやま	標高1,771mの山でビギナーの方でも気軽に登山でき途中雪渓や行雲の滝、令涼の滝、可憐な鉱山植物を楽しめる。運が良ければ氷河期から生息するといわれる「ナキウサギ」貴重な蝶「オオイチモンジ」高山植物の女王「コマクサ」また頂上付近には「タカネシオカマ大群落」が見られる。

表 2-2　主な観光対象(2)

項目	市町村名	名称	内容
資料館	上湧別町	上湧別町文化センターTOM	中湧別地区の旧国鉄名寄線・湧網線の鉄道用地（旧駅舎跡）を再開発し、21世紀への文化の架け橋として、平成5年4月にオープン。多目的ホール、漫画美術館、パソコン室、ＡＶコーナー完備の図書館。視聴覚室も配置。役場中湧別出張所、商工会事務局、中湧別バスターミナルを併設し、約400台の駐車場を完備。旧中湧別駅の跨線教やラッセル車をそのまま保存した鉄道資料館や百年を記念し造成した百年記念公園、百年記念塔もある。
	上湧別町	上湧別町ふるさと館JRY	上湧別町開基100年を記念し、平成8年8月にチューリップ公園の一角に建てられた郷土博物館。屯田兵の資料を多数展示。
	遠軽町	郷土館	市街地の中央にそびえたつ瞰望岩（がんぼういわ）の下に位置し、町民の憩いの場として親しまれ、エゾリス、シマリスなども訪れる公園内にある。郷土の歴史的資料や旧遠軽町友好姉妹都市（ブラジル・バストス市）の資料など、常設展示は約4,400点、その他1,300点を収蔵している。
	遠軽町	先史資料館	湧別川流域には、言葉や文字の文化がまだ生まれていなかった先史時代の人々の残した貴重な資料が多量に発見されている。その資料を集めた質・量ともに日本一と言われる資料館。毎年多くの研究者や考古学を学ぶ学生が遠軽町を訪れる。
	遠軽町 (丸瀬布)	昆虫生態館	丸瀬布市街から上武利方面に9kmの森林公園いこいの森のそば。生きた昆虫たちをエリアごとに分けた展示コーナーや蝶が飛び交う放蝶館、この地域の昆虫から世界の昆虫の生態展示や標本など。このほか、館内には工作体験コナー・自然情報コナー・学習コーナーなどもある。
施設	上湧別町	リバーサイドゴルフ場	きれいに整備された河川敷のゴルフ場。湧別川の河川敷を利用した１８ホールのゴルフ場。
	上湧別町	上湧別ラジコン飛行場	湧別川沿岸に設置されたラジコン飛行機専用の飛行場。
	遠軽町 (生田原)	木のおもちゃワールド館 ちゃちゃワールド	世界約40カ国の木のおもちゃを集めたミュージアム。からくりおもちゃ・あやつりおもちゃ・くるみ割り人形など大小1万点もの木のおもちゃを展示・収蔵している。子供たちが木のおもちゃで遊べる「遊びの広場」や木のおもちゃ作りが体験できる木工房「ゼペット」、そして、影絵の巨匠・藤城清治氏の作品を展示した「コロボックル影絵美術館」も併設している。
	遠軽町 (生田原)	オホーツクいしぶみの森オホーツク文学館	オホーツク圏を舞台に描かれた文学作品・資料など、約450品を収集展示。ＪＲ生田原駅の待合室も兼ねる。
	遠軽町 (丸瀬布)	森林公園いこいの森	面積約4.5haの自然林の他、キャンプ場、テニスコート、ローラースケート場、バイキング、魚釣り、日本で唯一の森林鉄道蒸気機関車等を有する森林公園
道の駅	上湧別町	かみゆうべつ温泉「チューリップの湯」	説明は「温泉」の項と同じ。
	遠軽町 (丸瀬布)	道の駅まるせっぷ	国道333号線沿いにあるドライバーズステーション。平成6年に認定された道の駅で、食事や休憩はもちろん、地場産品の紹介や地域観光情報を発信している。
	遠軽町 (白滝)	道の駅しらたき	旭川紋別自動車道の白滝パーキングエリアにある。白滝地域の農産品や加工品などの販売のほか、軽食が味わえるレストランコーナーを完備。
体験学習	遠軽町	国産材需要開発センター「木楽館」	地元の木工品などを展示する広場があり、研修室・工作室・塗装室・漆工室・磨き室・乾燥室・事務室などがある。またロビーなどの空間を利用した林業・木材の情報コーナー、遠軽町で産出した珪化木の展示コーナーがある。

表 2-3　主な観光対象(3)

項目	市町村名	開催月	名称	内容
イベント	湧別町 上湧別町	7月	オホーツクサイクリング	オホーツク海沿岸11か町村212km走破するサイクリング大会。金曜日はスタート地点である雄武町で受付を行い、ウェルカムパーティーが開かれ、土曜日に雄武町を出発。ゴールの斜里町を目指す。湧別町の休憩地点はファミリー愛ランドYOU。サイクリストたちは、ここで鋭気を養い、1日目のゴール常呂町に向けてスタートする。例年、1,300人ほどのサイクリストが参加。各地で住民の皆さんの声援を受け、212ｋｍの走破を目指し、果敢に挑戦する。
	湧別町	7月	ゆうべつ大漁みなとまつり	湧別漁港で開催。前夜祭は、コンサートや歌謡ショー、夏の夜を彩る花火大会が行われる。本祭は大漁パレード、水上むかでレース、浜ゆで毛がにの販売、毛がに鉄砲汁の無料コーナー、オホーツク遊覧船、ホッカイシマエビのつかみ取りなど、様々なアトラクションが行われる。
	湧別町	9月	湧別町産業まつり	湧別町産業まつりは、本町の農産物や海産物の生産を祝うイベントで、市街地中心の町民憩いの広場で開催される。女性・小中学生対象の鮭・鱒の生け捕り大会、オホーツク人間ホタテ引き大会、鮭ほかの原価販売、農産物即売会、飲み物無料コーナーほか様々な催しが行われ、近隣の市町村から多くの方々が訪れる。
	湧別町	期日未定	ふれあいゆうべつ元気まつり	自分の体力や健康状態を知り、健康づくりのきっかけにしてもらおうと毎年開催。足の裏健康測定や骨の健康度を測る健骨度測定、ボイスチェック、体力測定などちょっと気になる健康チェック項目が揃っている。
	上湧別町	5～6月	チューリップフェア	毎年およそ１ヵ月間、チューリップ公園を舞台に開催されるイベント。園内に咲き誇るチューリップは、「金太郎」や「桃太郎」、「かぐや姫」、「白雪姫」など童話の主人公の名前がついたものや、本場オランダから直輸入されたものなど珍しい品種を含めて120品種120万本ある。球根の販売やガーデニング用品の販売、記念イベントなどが開催される。
	上湧別町 遠軽町	2月	湧別原野100kmクロスカントリースキー大会	遠軽町、上湧別町の2町にまたがる白銀の湧別原野を舞台に繰り広げられるクロスカントリースキー大会。国内最長を誇る100kmの駅伝のほか、個人85kmコースや町村ごとに区間設定した5～25kmのコースを用意。
	上湧別町	5月	五鹿山公園まつり	多数のイベントや売店を設置。
	上湧別町	7月	商工会青年部サマーパーティー	上湧別町商工会青年部サマーパーティは昭和47年度から続く歴史ある事業。特別大サービスの青年部サマーパーティは町民に大変人気の高いイベント。料理やビール、抽選会とゲームなど。豪華景品も。
	上湧別町	8月	七夕まつり	七夕まつりは、孟宗竹や七夕あんどんを会場に設置し雰囲気のある七夕まつりとして、環境庁が選んだ「星空の街」に相応しいイベントとして定着している。様々なイベントや売店、歌謡ショーなど。
	上湧別町	9月	屯田ふるさとまつり	屯田兵が出現するセレモニーを皮切りに、メイン行事である「湧別 屯田大綱引大会」が町内を四中隊と五中隊にわけて実施されたほか、屯田太鼓やよさこい屯田踊りなどのアトラクション、地元で生産された農産物の販売など。また、屯田鍋やスイートコーンが無料で配られるなど家族で楽しめるイベント。
	遠軽町	7月	遠軽がんぼう夏まつり	市街地を練り踊る千人踊り、音楽パレードなど、賑やかな催し物や、味覚などの屋台が並ぶ。
	遠軽町	8月下旬	コスモス開花宣言花火大会	太陽の丘えんがる公園のコスモスの開花を宣言する花火大会。YOSAKOIソーランの踊りが披露された後、カウントダウンと共に花火が打ち上げられる予定。
	遠軽町	9月	太陽の丘コスモスフェスタ	約10haの広大な花畑に咲く約1,000万本のコスモスを観賞しながら、食べる、遊ぶなど楽しいイベント多数。
	湧別町 上湧別町 遠軽町	9月下旬	みずウオークオホーツク大会	湧別川沿いを歩き自然とふれ合うイベント。20、13、7キロメートルの3コース。参加者には「かみゆうべつ温泉チューリップの湯」の入浴券配布
	遠軽町 (生田原)	8月	木のおもちゃ王国	木のおもちゃ作り、王国交流会、キャンプ
	遠軽町 (生田原)	7月	ヤマベまつり	ヤマベ解禁日に合わせ、７月上旬にヤマベの棲む川生田原川河畔公園で、フィッシング大会や、ビアパーティで、ヤマベ解禁を祝う。
	遠軽町 (丸瀬布)	6月	まるせっぷ藤まつり	約200株の藤の花が咲き乱れる公園で、藤娘撮影会、野外コンサート等のイベント。
	遠軽町 (丸瀬布)	7月	山彦の滝まつり	山彦の滝に祀られている成田不動尊の例祭
	遠軽町 (丸瀬布)	7月	いこいの森フィッシング大会	自然豊かないこいの森を流れる湧別川水系武利川でのフィッシング大会。
	遠軽町 (丸瀬布)	8月	まるせっぷ観光まつり	「ＳＬ・清流・森林」をテーマとした町民手作りのイベント。雨宮号ナイトラン、花火大会、トンカチ教室など

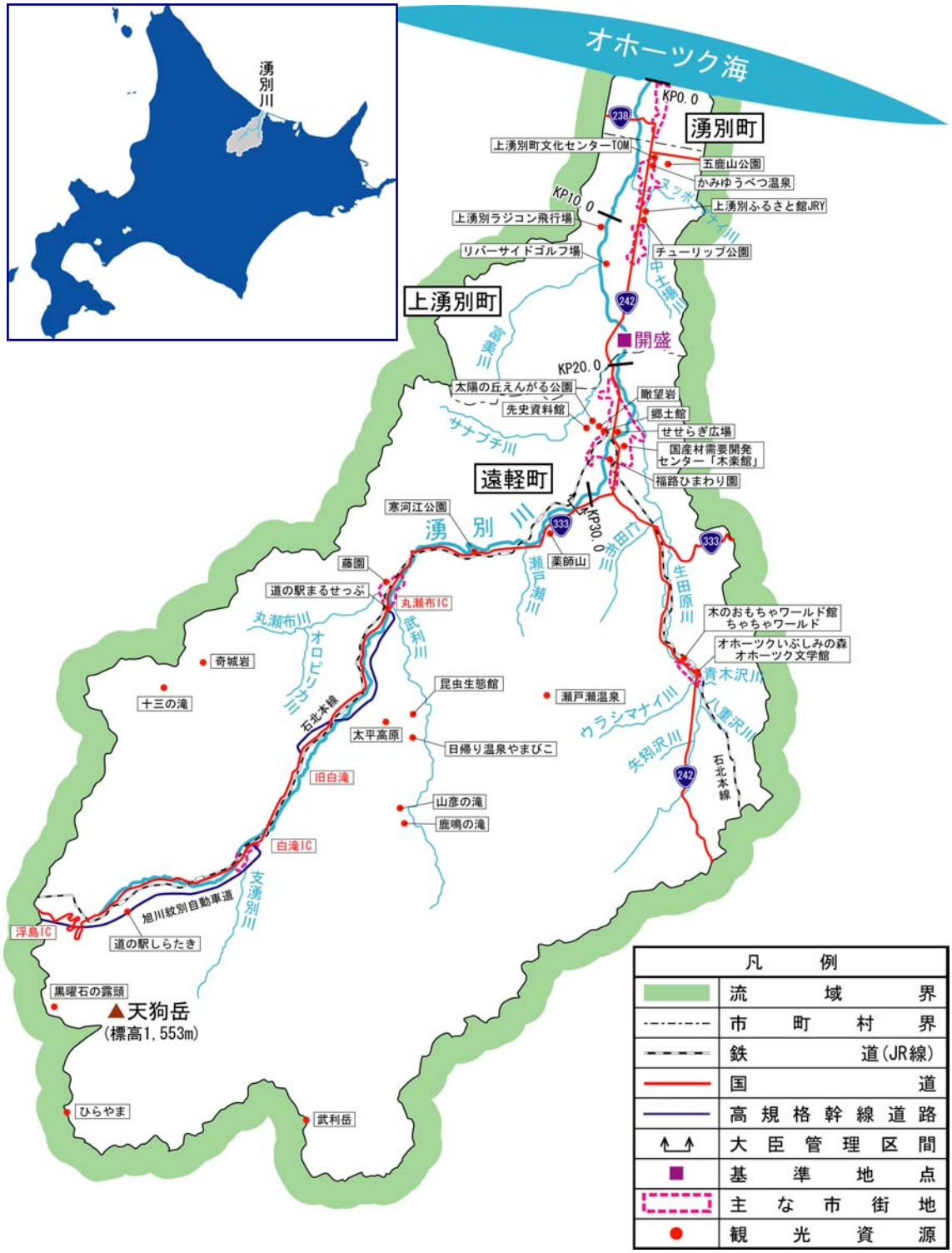


図 2-2　湧別川流域の主な観光施設位置図

2-3-2 文化財

湧別川流域には歴史的に重要な文化財、史跡は、表 2-4に示すとおり国指定で 1 件、道指定が 4 件(内 2 件は北海道遺産)、町指定が 2 件の文化財がある。

表 2-4　指定文化財

指定の種類	名称	所在地 指定年月日	概要
国	白滝遺跡群	遠軽町上白滝 平成元年1月9日	旧石器時代の集落跡であるこの遺跡は黒曜石原産地に立地し、多量に出土する石器は当時の生活と石器製作の実態を解明する上で重要。特に湧別技法による細石刃製作は沿海州等、大陸文化の関連において極めて学術的価値が高い。
道	白滝の流紋岩球顆	遠軽町白滝国有林内 昭和39年10月3日	曹長石を主とした流紋岩が球顆状をなして続いている。
	幌加川遺跡出土の石器群	遠軽町西町１丁目 平成3年3月30日	湧別川支流の幌加湧別川流域で収集されたものであるが、北海道の旧石器時代を解明する上で学術的に貴重な考古資料である。（札滑型糸田石刃核等1902点）
町	幌加内遺跡出土の 先土器時代石器群 （1903点）	遠軽町 昭和61年3月1日 （遠軽町先史資料館）	本町在住の郷土史研究家故遠藤栄治氏によって白滝村幌加内川遺跡から収集されたもので、学問的に質・量すべてに貴重であり、北海道における史実の解明に大きな足跡を残したきわめて貴重な資料である。
	幌加沢遺跡遠間地点	遠軽町 昭和50年10月30日	年代的にはBP14,000年～12,000年にわたって存続したと考えられる細石刃文化時代の石刃、掻器、石槍、彫器、細石刃核、スキー状スポール、舟底形石器の包蔵されていることが確認されている。
北海道遺産	森林鉄道蒸気機関車 『雨宮21号』	遠軽町丸瀬布 平成16年10月22日	「雨宮21号」は東京・雨宮製作所で製造された初の国産11トン機関車。昭和3年、丸瀬布一武利意森林鉄道に配置され、国有林から伐り出した丸太や生活物資の搬送に携わってきたが昭和36年に廃止。地元の強い要望で昭和51年、北見営林局から町に譲渡され、町は“森林公園いこいの森”を建設、機関車を走らせた。動態保存は道内では唯一のもの。
	屯田兵村と兵屋	北海道各地(上湧別町) 平成16年10月22日	屯田兵は明治8年の札幌郡琴似村に始まり、開拓と軍備のため、明治32年の士別、剣淵まで道内各地に37の兵村が置かれた。上湧別町には当時の区画の北兵村地区と南兵村地区が残る。

2-4 自然公園等の指定状況

湧別川流域は自然環境に恵まれた地域が数多く存在しており、これらの保護・保全管理が図られている。湧別川水系における自然公園等の法令指定状況は以下のとおりである。

2-4-1 鳥獣の保護及び狩猟の適正化に関する法律(平成14年度法律第88号)に基づく鳥獣保護区

7ヶ所で鳥獣保護区の指定がなされている。また、猟銃禁止区域は1ヶ所で指定されている。

表 2-5　各種保護地域指定一覧

鳥獣保護区等区域

整理番号	市町村	鳥獣保護区名	区域	存続期間	備考
177	遠軽町	ひらやま	紋別郡遠軽町に所在する国有林網走西部森林管理署2036林班の区域	平成15年3月31日～平成24年9月30日	森林鳥獣生息地790ha
178	遠軽町	武利	紋別郡遠軽町に所在する国有林網走西部森林管理署88林班及び89林班の区域	平成15年10月1日～平成25年9月30日	森林鳥獣生息地389ha
179	遠軽町	上丸鳥	紋別郡遠軽町に所在する国有林網走西部森林管理署事業区255林班から257林班までの区域	平成13年10月1日～平成23年9月30日	森林鳥獣生息地625ha
180	遠軽町	遠軽	紋別郡遠軽町留岡に所在する北海道家庭学校用地(民有林72林班を除く。)の区域 [特保]遠軽町留岡に所在する民有林74林班のうち、6から9まで、11、12、21、24、25、27、35、39、40、41、45から48まで、50、52小班の区域	平成11年10月1日～平成21年9月30日	森林鳥獣生息地368ha [特保66ha]
181	遠軽町	瀬戸瀬	紋別郡遠軽町に所在する国有林網走西部森林管理署113林班及び114林班の区域	平成15年10月1日～平成25年9月30日	森林鳥獣生息地340ha
182	遠軽町	野上	紋別郡遠軽町に所在する網走西部森林管理署事業区2林班は、二小班及び3林班と、二小班の区域	平成12年10月1日～平成22年9月30日	森林鳥獣生息地63ha
209	上湧別町	五鹿山	紋別郡上湧別町字北兵村二区107番の1・2、108番の1、318番の1・3、319番の1・2および4から9の区域に所在する五鹿山公園の区域	平成9年10月1日～平成19年9月30日	身近な鳥獣生息地27ha

整理番号	市町村	銃猟禁止区域	区域	存続期間	備考
46	湧別町	川西古川	紋別郡湧別町字川西に所在する湧別川左岸と町道西1号の交点から見通し線で北東に進みオホーツク海汀線との交点を起点とし、この点から南西に見通し線で進み湧別川左岸(河川敷除く。)と町道西1号(道路敷除く。)との交点にいたり、この点から同町道を北西に進み町道西四線との交点に至り、この点から同町道を北東に進み同町道の東端に至り、この点から見通し線で北東に進みオホーツク海汀線との交点に至り、この点から同汀線を南東に進み起点に至る区域内のうち、旧湧別川の水面の区域	平成14年10月1日～平成24年9月30日	14ha

※ 平成17年度鳥獣保護区等位置図(別冊編)より

2-4-2 道指定天然記念物

遠軽町白滝の流紋岩球顆が昭和39年10月3日指定されている。

湧別川の上流に約100mにわたり、流紋岩質黒曜岩中に晶出した球顆が集積に露出している。

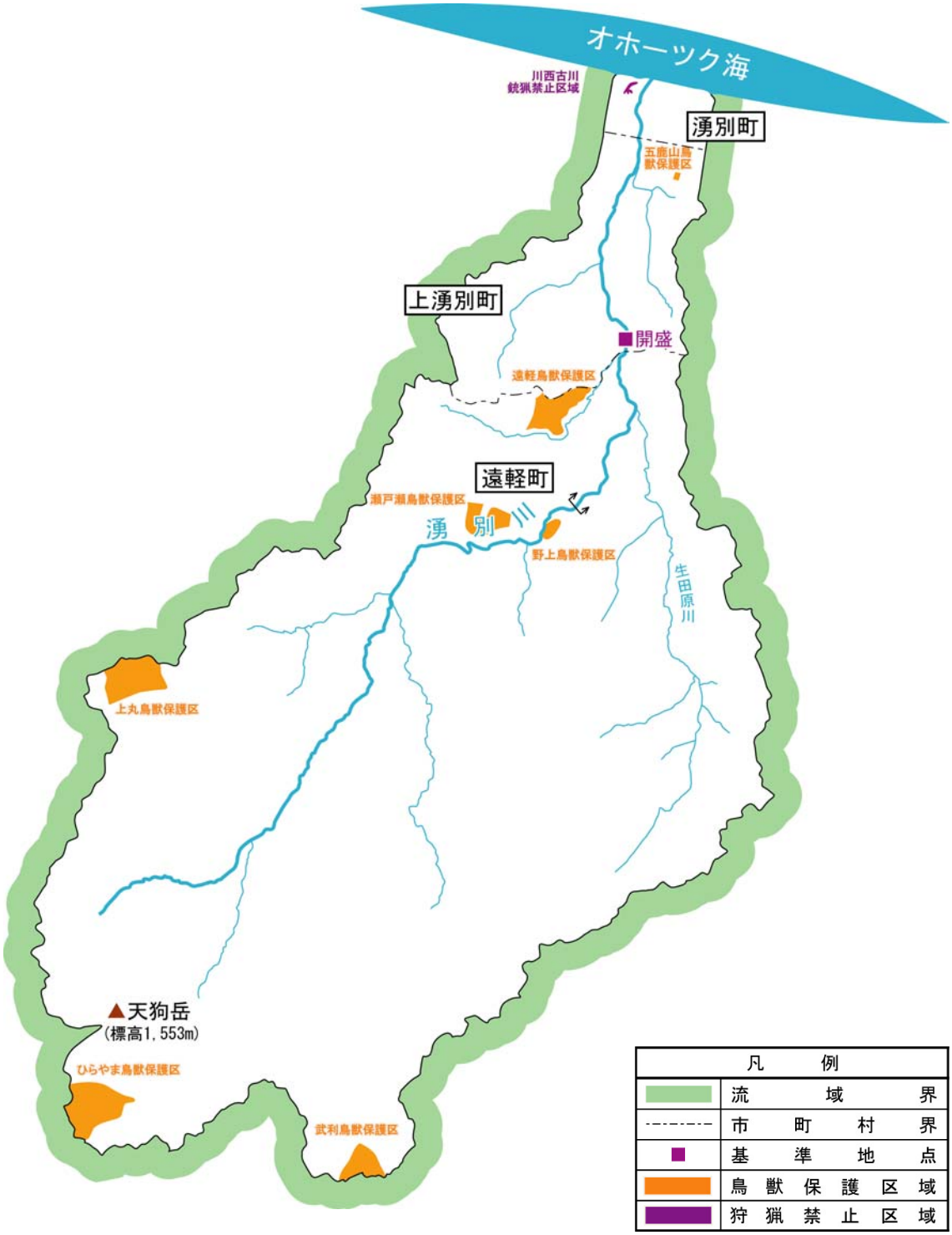


図 2-3　鳥獣保護区・狩猟禁止区域

2-5 市民活動

湧別川流域では、流域関係町で構成される湧別川流域懇談会が設置され、今後の川のあるべき姿や、川づくりのあり方、治水効果の早期向上や河川整備について、市民等一体となって取り組んでいる。

また、湧別川の環境を守るため、河川管理者と一緒に地域住民の方々のボランティアによる清掃活動を実施している。

写真 2-21　湧別川流域懇談会の様子

写真 2-22　カヌー清掃

出典：オホーツク圏の総合情報サイト

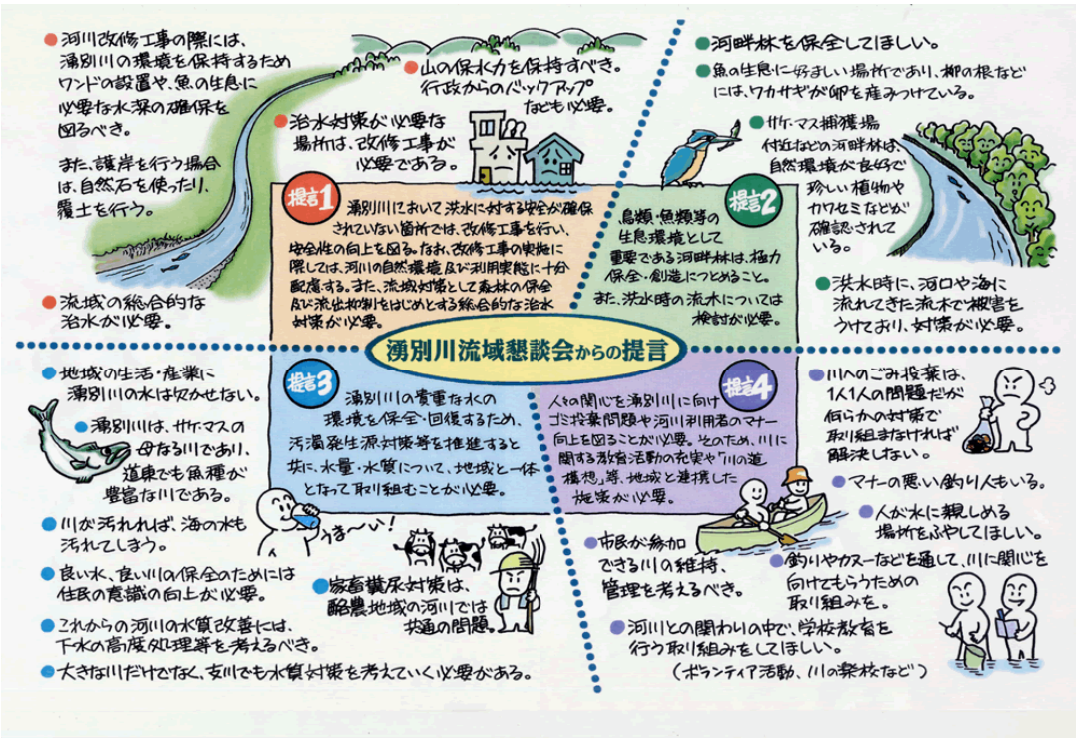


図 2-4　湧別川流域懇談会からの提言（2001.2.26）

出典：北海道開発局　網走開発建設部

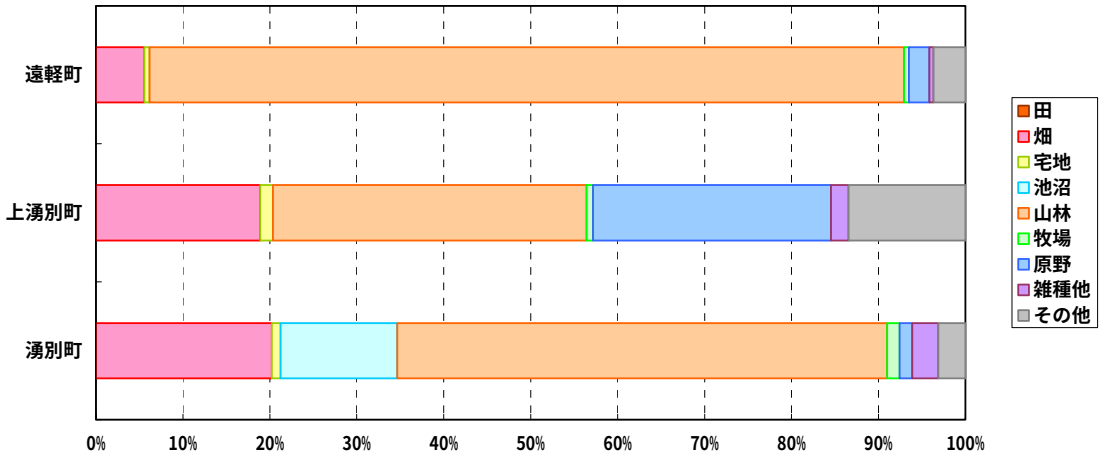
3.流域の社会条件

3-1 土地利用

流域自治体の土地利用の状況は、以下のとおりであり、総面積 1,891.09㎢のうち、山林の占める割合が約 75%で最も多く、続いて農用地の約 10%となっている。

山林は上流の遠軽町で総面積の約 87%に対し、中下流域の上湧別町は約 36%、湧別町は約 56%となっている。

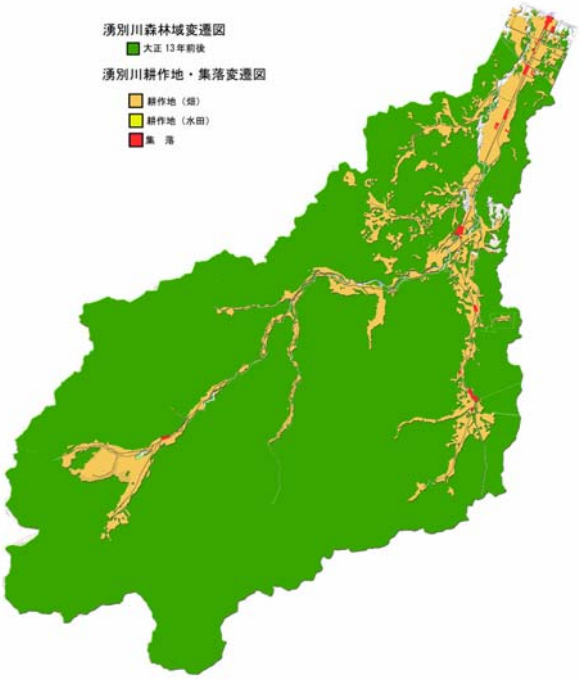
農用地は遠軽町で約 6%、上湧別町及び湧別町では約 20%となっており、水田の比率は小さく大半が畑作地・草地である。



※遠軽町、生田原町、丸瀬布町、白滝村は平成17年10月1日に遠軽町として市町村合併した

出典 ： 平成17年北海道市町村勢要覧（平成15年1月1日）

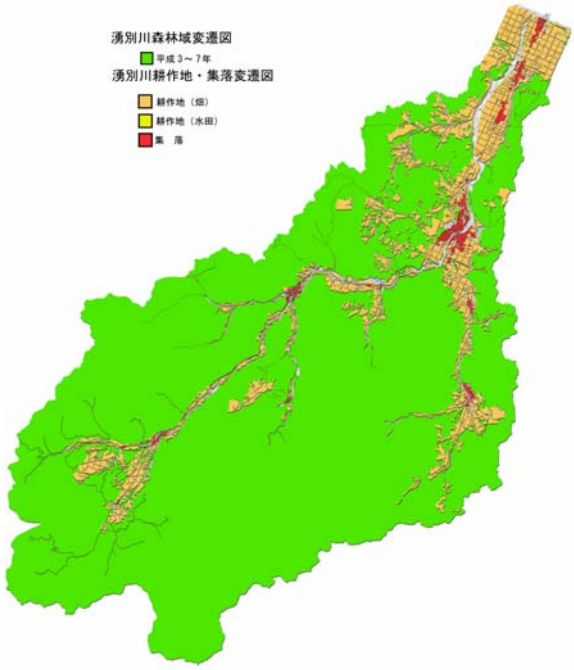
図 3-1　流域自治体の土地利用状況



[大正]

[昭和中期]

[昭和後期]



[平成]

図 3-2　土地利用の経年変化

3-2 人口

湧別川流域は、遠軽町、上湧別町、湧別町の 3 町からなる。流域関係町村の総人口は平成 17 年では 34,736 人となっており、昭和 28 年からの推移は表 3-1のとおりであり、約 46%の減少となっている。市町村別の昭和 28 年に対する平成 17 年の増減比は、遠軽町で約 39%の減少、上湧別町で約 47%の減少、湧別町で約 64%の減少となっており、現在も減少傾向にある。

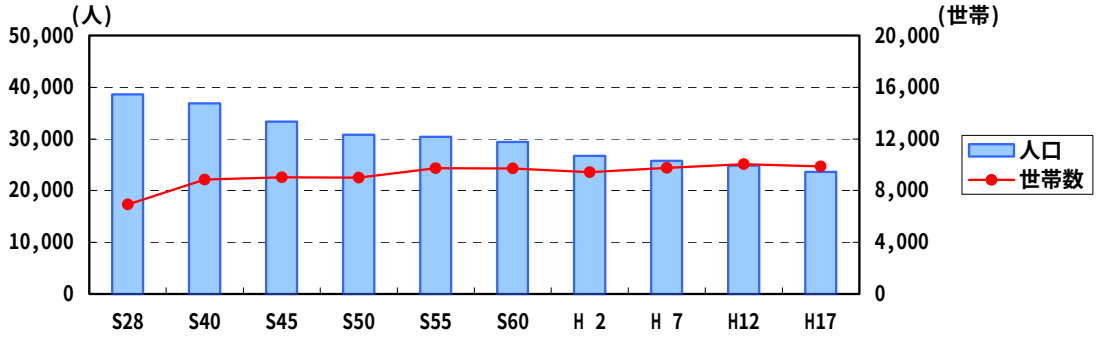
※遠軽町は平成 17 年 10 月 1 日に遠軽町、生田原町、丸瀬布町、白滝村が合併したため合計値とした。

表 3-1　流域内人口

区分	湧別町	上湧別町	遠軽町	3町合計
面積 (km^2)	344.35	161.39	1,332.32	1,838.06
総人口 (人)	5,260	5,841	23,635	34,736
世帯数 (世帯)	1,759	2,335	9,869	13,963
人口密度 (人/km^2)	15.3	36.2	17.7	18.9

※1 面積の出典：平成17年北海道市町村勢要覧（平成15年1月1日）
※2 総人口、世帯数の出典：平成17年国勢調査（平成17年10月1日）
※3 遠軽町、生田原町、丸瀬布町、白滝村は平成17年10月1日に遠軽町として市町村合併した

遠軽町



※遠軽町、生田原町、丸瀬布町、白滝村は平成17年10月1日に遠軽町として市町村合併した

(出典 ： 国勢調査)

図 3-3　遠軽町の人口・世帯数の推移

上湧別町

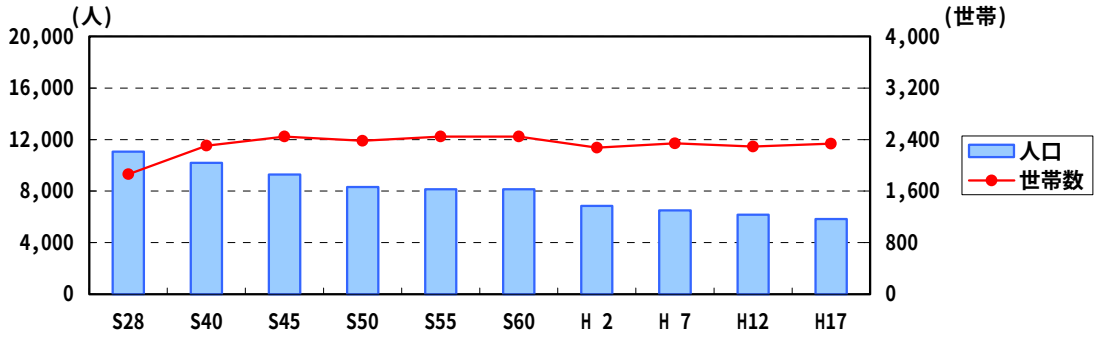


図 3-4　上湧別町の人口・世帯数の推移

(出典 ： 国勢調査)

湧別町

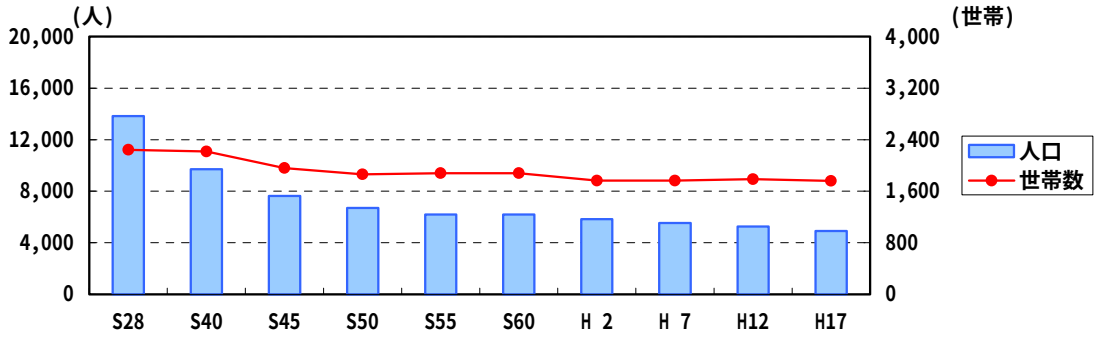


図 3-5　湧別町の人口・世帯数の推移

(出典 ： 国勢調査)

全体

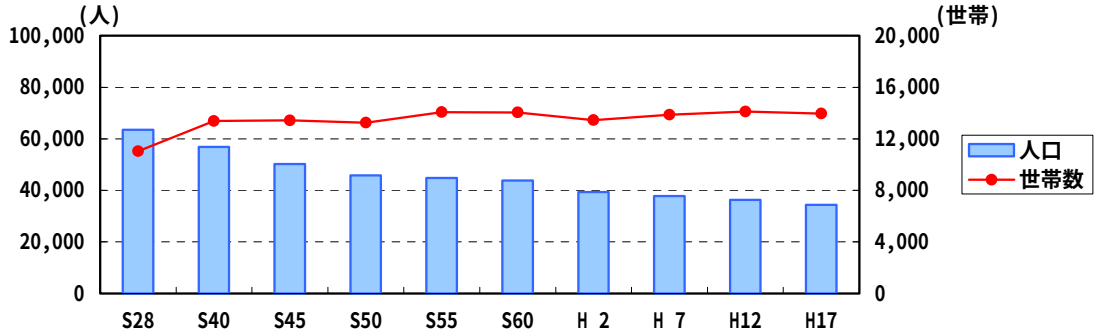


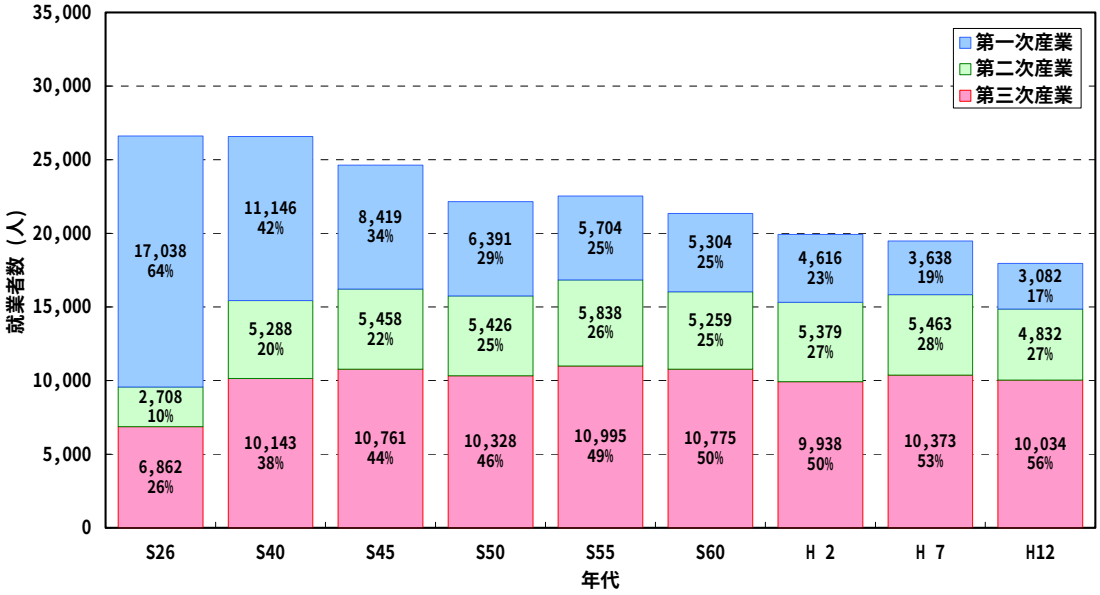
図 3-6　流域関係市町村の人口・世帯数の推移

(出典 ： 国勢調査)

3-3 産業・経済

流域内の産業別就業人口の推移を見ると、流域の産業は農林業を主体とし、河口の湧別町では漁業も盛んであったが、近年の第一次産業の衰退により、第一次産業人口が昭和 26 年に比べ平成 12 年では 17,038 人から 3,082 人と約 18%に減少しているが、第二次産業は約 1.8 倍、第三次産業は約 1.5 倍と高い伸びを示している。

第一次産業就業人口を市町村別で見ると、湧別町で比較的高く約 45%となっているが、上湧別町で約 20%、遠軽町で約 10%程度である。第二次産業就業人口は各市町村とも 21%から 31%程度となっており、第三次産業就業人口は、遠軽町で高く約 63%となっている。その他、上湧別町で約 49%、湧別町で約 34%程度と比較的高い比率を占めている。



出典 ： 北海道市町村勢要覧

図 3-7　産業 3 部門別就業者数の推移

表 3-2　産業別就業人口と構成比

(単位:人)

市町村	区分			
	第一次産業人口	第二次産業人口	第三次産業人口	総数
湧別町	1,297	596	965	2,858
	45.4%	20.9%	33.8%	100.0%
上湧別町	607	970	1,526	3,103
	19.6%	31.3%	49.2%	100.0%
遠軽町	1,178	3,266	7,543	11,987
	9.8%	27.2%	62.9%	100.0%
全道	217,908	602,859	1,881,089	2,701,856
	8.1%	22.3%	69.6%	100.0%

※1 下段は構成比率(%)
※2 出典 ： 平成17年北海道市町村勢要覧（平成12年10月1日）
※3 遠軽町、生田原町、丸瀬布町、白滝村は平成17年10月1日に遠軽町として市町村合併

3-4 交通

産業の基盤となる幹線交通系統のうち道路網は、オホーツク海沿いを結ぶ国道 238 号線、湧別町から湧別川に沿って遠軽(生田原)を通り常呂川流域の置戸、帯広方面へ通じる国道 242 号線、遠軽から旭川方面に通じる国道 333 号線があり、オホーツク各都市間と道内各地を結ぶ交通体系に貢献している。

一方、鉄道網は、道央圏とオホーツク沿岸を結ぶ JR 石北本線はオホーツク地方の物資輸送に大きな役割を果たしている。

現在、旭川と紋別を結ぶ高規格幹線自動車道の建設が進められている他、遠軽と北見を結ぶ地域高規格道路整備の計画が進められており、流域のさらなる発展が期待されている。

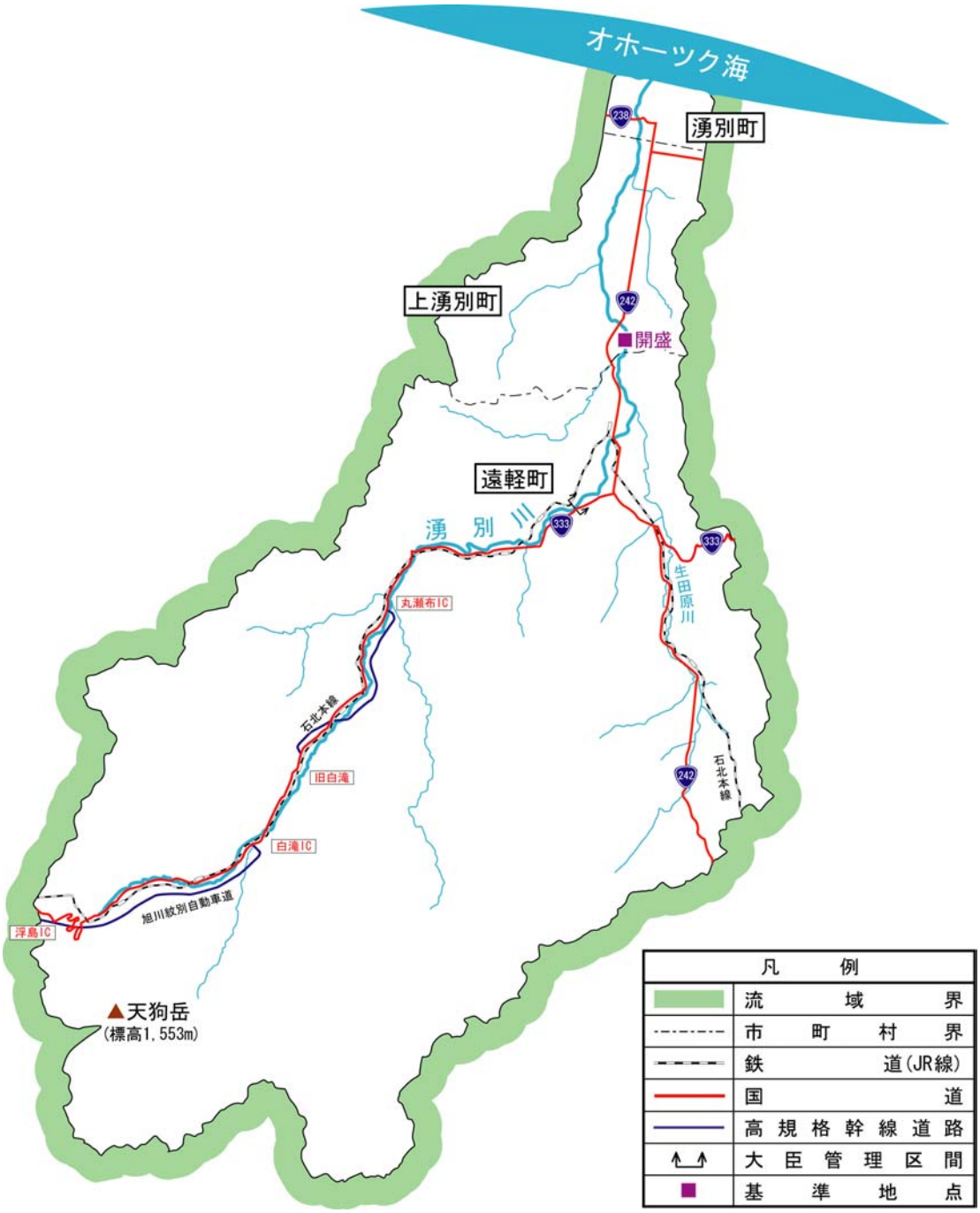


図 3-8　湧別川流域における道路･鉄道網位置図

3-5 関係ある法令の指定状況

3-5-1 第 6 期北海道総合開発計画

北海道総合開発計画は、行政改革や国際化、地球環境問題への知見の集積等の大きな情勢の変化を受け、地球規模に視点をおいた食料基地、北の国際交流圏の形成、観光・保養基地の形成や北海道が有する美しく雄大な自然環境の保全、安全でゆとりのある生活環境の創造を目的としている。

これらの目的を重点的・効率的に推進してゆくための一方針として広域的・複合的な地域プロジェクトの推進を掲げており、複数の市町村が連携を図り、総合的に取り組むプロジェクトを支援してゆくものとしている。この地域プロジェクトの中には、河川事業に直接あるいは間接的に関連するものも少なくない。

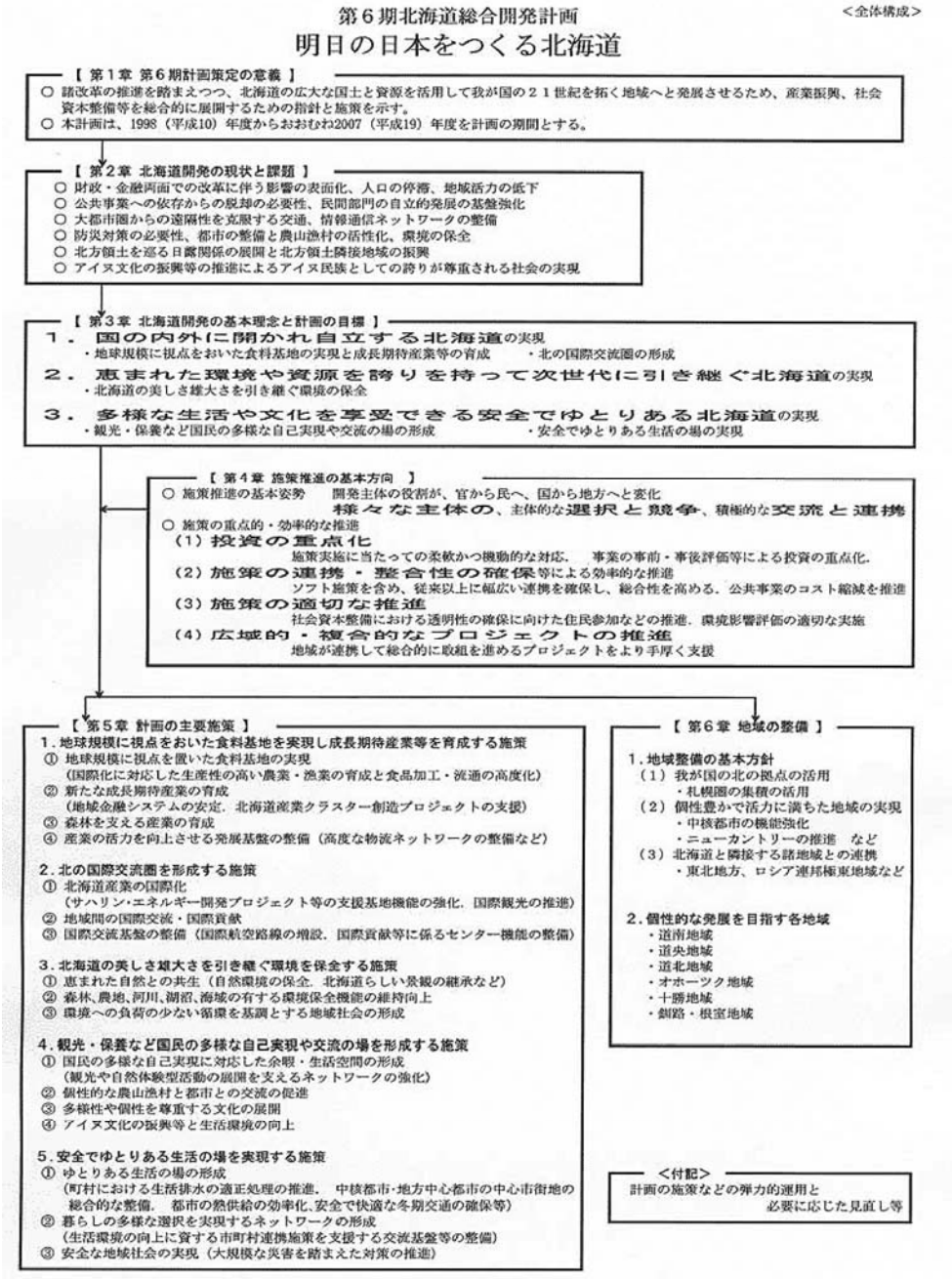


図 3-9　第 6 期北海道総合開発計画

(出典:北海道局 HP)

3-5-2 都市計画

湧別川流域は、遠軽町・上湧別町・湧別町の 3 町となっている。流域の上流に位置する遠軽町は、平成 17 年 10 月 1 日に生田原町、丸瀬布町、白滝村を併せ、新遠軽町として合併したが、そのうち 1,985ha が都市計画区域に指定されている。

なお、上湧別町・湧別町は、都市計画区域が指定されていない。

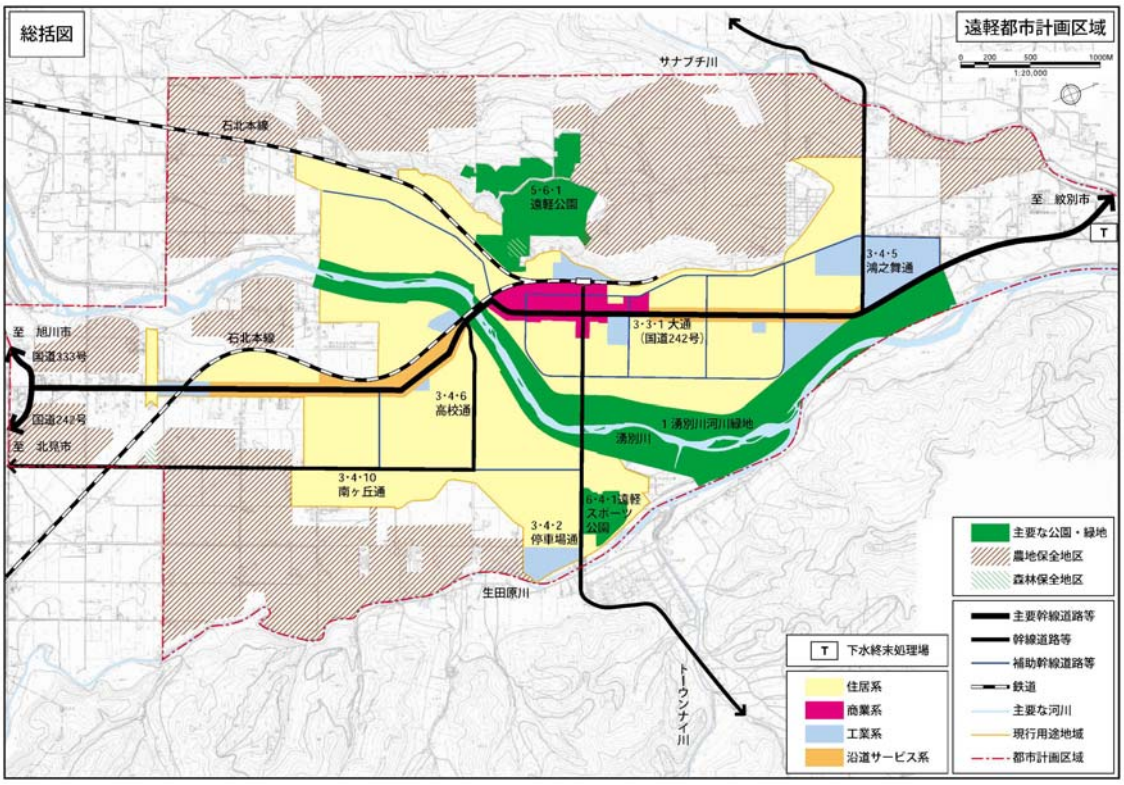


図 3-10　遠軽町 都市計画図

4.水害と治水事業の沿革

4-1 既往洪水の概要

湧別川流域では、過去に以下に示す洪水が発生している。

表 4-1　既往の主要洪水の概要

洪水発生年月	気　象 要　因	開盛地点流域 平均雨量 (総雨量)	開盛地点 流量 (㎥/s)	被害状況
大正 11 年 8 月	台風	163	推定 1,589	家屋浸水 496 戸
昭和 37 年 8 月	台風 9 号	72	739	被害家屋 37 戸、氾濫面積 352ha
昭和 46 年 10 月	低気圧	95	794	被害家屋 201 戸、氾濫面積 634ha
昭和 50 年 8 月	台風 6 号	125	901	被害家屋 39 戸、氾濫面積 43ha
昭和 56 年 8 月	台風 12 号	151	1,120	被害家屋 39 戸、氾濫面積 777ha
平成 4 年　9 月	台風 17 号	69	812	被害家屋 104 戸、氾濫面積 3,057ha
平成 10 年 9 月	台風 5 号	101	1,291	被害家屋 138 戸、氾濫面積 7.2ha
平成 13 年 9 月	台風 15 号	150	1,010	被害家屋 3 戸、氾濫面積 0.03ha
平成 18 年 8 月	前線	155	972	被害等不明
平成 18 年 10 月	低気圧	215	1,346	被害家屋 114 戸、氾濫面積 74.8ha

注 1)被害等は、「水害」「水害統計」及び「北海道災害記録」「北海道地域防災計画(資料編)」による
注 2)北海道災害記録による被害等は集計上、支川、内水被害を含む。流域外被害も含む
注 3)平成 18 年 8 月及び 10 月洪水は、速報値 (8 月洪水は被害等不明)

主な水害は以下のとおりである。湧別川の既往最大は、大正 11 年 8 月洪水である。

表 4-2　主な洪水の概要表 被害実態

洪水発生年月	気象要因	開盛地点流域平均雨量（総雨量）	開盛地点流量（m3/s）	被害
大正11年 8月	台風	163	1589	「北海道地域防災計画」より 全道で死者117名、浸水家屋21,597戸、同流失872戸、田畑87,975ha、同流失646ha、損害額2,715万円
昭和37年 8月	台風3号	72	739	「水害統計」より 浸水面積：　352ha 建物被害：　37棟 「北海道地域防災計画」より 全道で行方不明35、傷39、全壊家屋163、流失375、半壊1,358、床上浸水16,373、床下浸水32,372、非住家破壊18,315戸、田畑被害240,909ha、河川2,712、道路1,072、橋564ヵ所欠壊、漁船40、漁港施設104件被災、その他、被害総額75,883,133千円(一部10号被害含む)
昭和41年 7月	台風4号	67	－	「災害記録」より 建物被害：　20棟 「北海道地域防災計画」より 道南・道東で死者5名、行方不明17名、全壊1棟、床上浸水25棟、床下浸水283棟、土木被害額183,331千円、農業被害額102,246千円、水産、林業等に被害あり、被害額計340,258千円。
昭和46年10月	低気圧	95	794	「水害統計」より 浸水面積：　230ha 建物被害：　82棟 「災害記録」より 浸水面積：　634ha 建物被害：　201棟
昭和50年 8月	台風6号	125	901	「水害統計」より 浸水面積：　43ha 建物被害：　41棟 「災害記録」より 建物被害：　39棟 「北海道地域防災計画」より 全道で交通関係・国鉄運休1,271本以上、主要道路不通または通行止。建物・住家全壊34、半壊、一部破損53、非住家全壊2棟。浸水家屋・床上6,294、床下16,503。農業・農耕地冠水51,407、埋没1,016。海難・漁船沈没1。人身事故・死者、行方不明など12、負傷者7。電力関係・電柱折損39、停電4,000。土木関係・道路冠水、損壊など602、がけ崩れ136、堤防決壊63、鉄道冠水29、橋流失83。その他・回線障害86、家畜被害940万。
昭和54年 4月	融雪	－	241	「水害統計」より 浸水面積：　14ha 建物被害：　60棟 「北海道地域防災計画」より 道東・網走・宗谷で交通関係・国鉄11本、不通路線2、国鉄路床冠水。浸水家屋・床上96棟、床下229棟。農業・農耕地流失、埋没など21、冠水104、畑作物390。土木関係・道路の冠水決壊など177以上、堤防決壊28、橋流失12。建物・住宅全半壊23棟以上、無線塔倒壊1基、公共施設破損3。その他・ビニールハウス、サイロなど損壊65。人身事故・負傷者2。
昭和56年 8月	台風12号	151	1120	「水害統計」より 浸水面積：　155ha 建物被害：　40棟 「災害記録」より 浸水面積：　777ha 建物被害：　39棟 「北海道地域防災計画」より 全道で死者8人、重傷5人、軽傷9人。家屋被害27,257棟、被害額270,481,037千円。
平成 4年 9月	台風17号	69	977	「水害統計」より 浸水面積：2937ha 建物被害：　111棟 「災害記録」より 浸水面積：3057ha 建物被害：　104棟
平成10年 9月	台風5号	101	1291	「水害統計」より 浸水面積：　7.2ha 建物被害：　124棟 「災害記録」より 建物被害：　138棟 「北海道地域防災計画」より 全道で死者2名、重傷者3名、軽傷者2名、家屋被害1,100棟、被害総額40,396,892千円。
平成13年 9月	豪雨及び台風15号	150	1010	「水害統計」より 浸水面積：0.03ha 建物被害：　3棟

出典
「水害統計」国土交通省河川局
「災害記録」北海道
「北海道地域防災計画」平成14年3月発行　北海道防災会議

- **明治 31 年 9 月 6～8 日洪水**

全道的な大豪雨は 8 日までに 157 ㎜(札幌測候所観測)に達し、湧別川の増水は実に一丈 4 尺余(4.6m)におよんだと言われ…川沿の農作物と居小屋 20 余戸はたちまち押し流され、逃げ後れたものは屋根を破って逃れたり…なかには痛ましい溺死をとげた人もあった。…かって経験したこともない…ために学田農場入植者は飢餓の恐怖から士気を失い…ついに湧別その他に逃走するものが続出した。4 号線市街も約 1m の冠水で全村水に没した。(湧別町史より)

- **大正 11 年 8 月 23～25 日洪水**

8 月 21 日朝グアム島の北方海上に台風が発生し、次第に北上して 24 日朝伊豆半島の南端に達し、千葉県下を通過し東海岸に沿って進み 24 日の深夜より 25 日にわたり北海道の南東海岸を過ぎ、釧路・根室の国境辺を抜けてオホーツク海に出て遠く北東に去った。

8 月 24 日に至り本降りとなり、その日の夕暮時には大粒のどしゃぶりとなった。その時の湧別川は平水より約 4 尺ほどの増水で、なお、増水する傾向はあったが誰もが大洪水になろうとは想像もしなかった。8 月 25 日夜来の激雨は幾分小降りになっていたが、未明、既に湧別川は未曽有の大氾濫を来していた。十分間に 1 尺(30 ㎝)の割合で増水した激流は大うねりを打ち、それはたとえようもない大洪水であった。

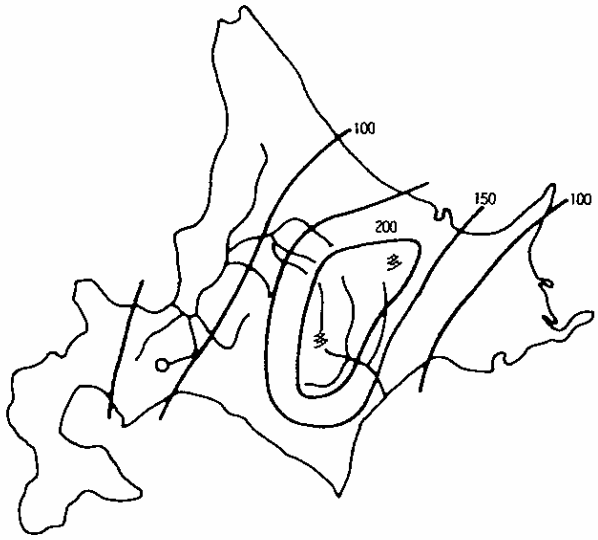


図 4-1　大正 11 年 8 月 23 日から 25 日までの等雨量線図

- **昭和 56 年 8 月 4 日～6 日洪水**

8 月 3 日から 6 日にかけ、サハリン南部を通過した低気圧からのびる前線が本道中央部を横切って停滞し、また、台風 12 号の北上により前線を活発化させたため、全道的に記録的な豪雨となった。

3～6 日の雨量は白滝 215 ㎜、遠軽 112㎜ に達し、特に白滝では既往第 1 位を記録するなど、全域に降り特に山間部で強く降り続いた。このため全水位観測所で警戒水位を突破し、遠軽 0.88m、開盛 1.56m、中湧別 0.7m 上回った。この水位は、昭和 50 年洪水位を 0.17～0.43m、中湧別 0.7m 上回るもので、遠軽町で内水氾濫(0.3ha)、湧別河口右岸で外水氾濫(8.6ha)、浸水家屋(約 20 戸)、橋梁 2 橋(橋脚洗掘沈下 1、流失 1)等の被害を破った。

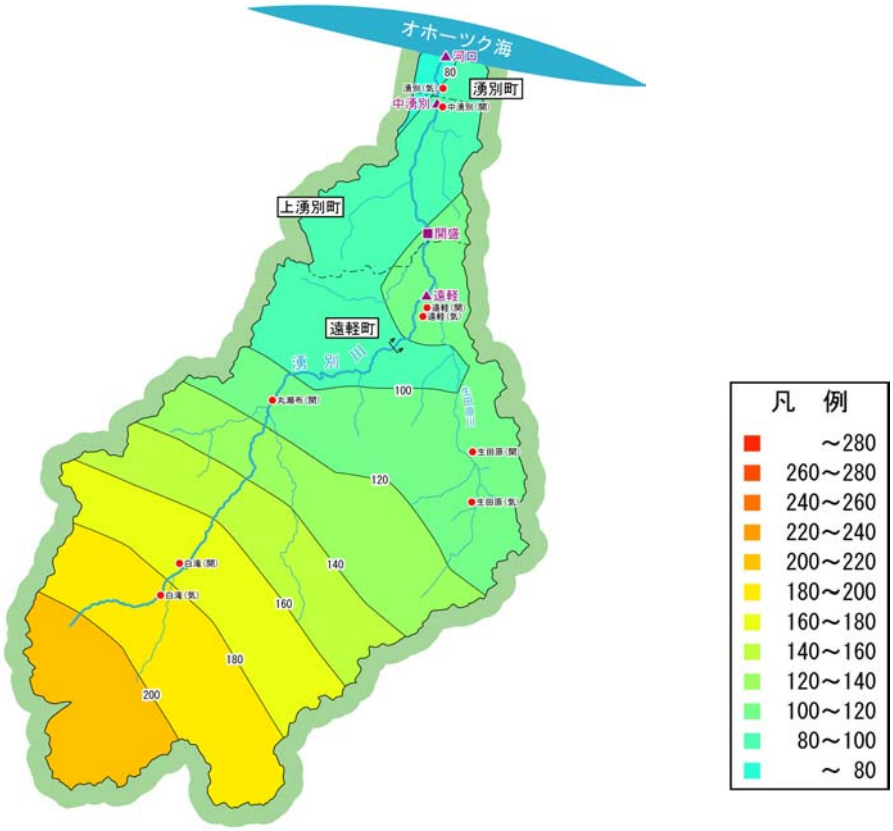


図 4-2　湧別川の総降雨量分布（昭和 56 年 8 月）

写真 4-1　昭和 56 年台風 12 号による被災状況

写真 4-2　昭和 56 年 8 月洪水における湧別川の状況

- **平成 4 年 9 月 10 日～13 日洪水**

北海道付近に停滞している前線が活発となり、また、9 月 10 日午後 3 時現在、八丈島の東約 410㎞ にある大型で強い台風 17 号は、勢力を保ちながらさらに北上を続け、9 月 1 日 0 時には国後島付近を通過しオホーツク海へ抜けた。

このため、9 月 10 日午前中から全道的に降り始めた強い雨のため、10 日 16 時 00 分札幌気象台は、台風と前線に関する情報を発令した。

また、網走地方気象台は、9 月 11 日 19 時 30 分紋別地方に大雨洪水警報を発令した。

その後も強い雨が、継続的に 12 日早朝まで続き、降り始めから総雨量は、中湧別(開)129㎜となった。

- **平成 10 年 9 月 16 日～18 日洪水**

平成 10 年 9 月 16 日午前 4 時ごろ静岡県付近に上陸した台風 5 号は、関東地方を北上し、16 日正午ごろには仙台市付近を通過し、いったん三陸沖海上に出た後、16 日午後 8 時すぎ釧路市付近を再上陸した。その後は北北東に進路を進め 16 日深夜に根室沖の海上に抜けた。

このため、網走・北見・紋別地方は 16 日から 17 日にかけて強い雨が降り続き遠軽で 127㎜を記録した。

写真 4-3　平成 10 年 9 月洪水における湧別川の状況

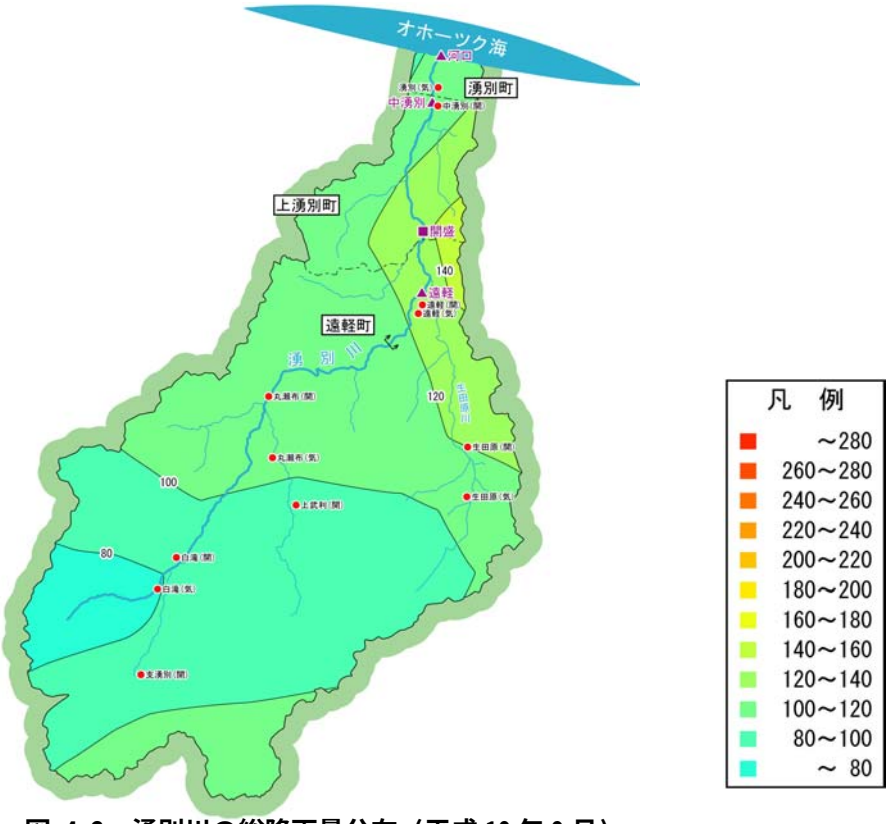


図 4-3　湧別川の総降雨量分布（平成 10 年 9 月）

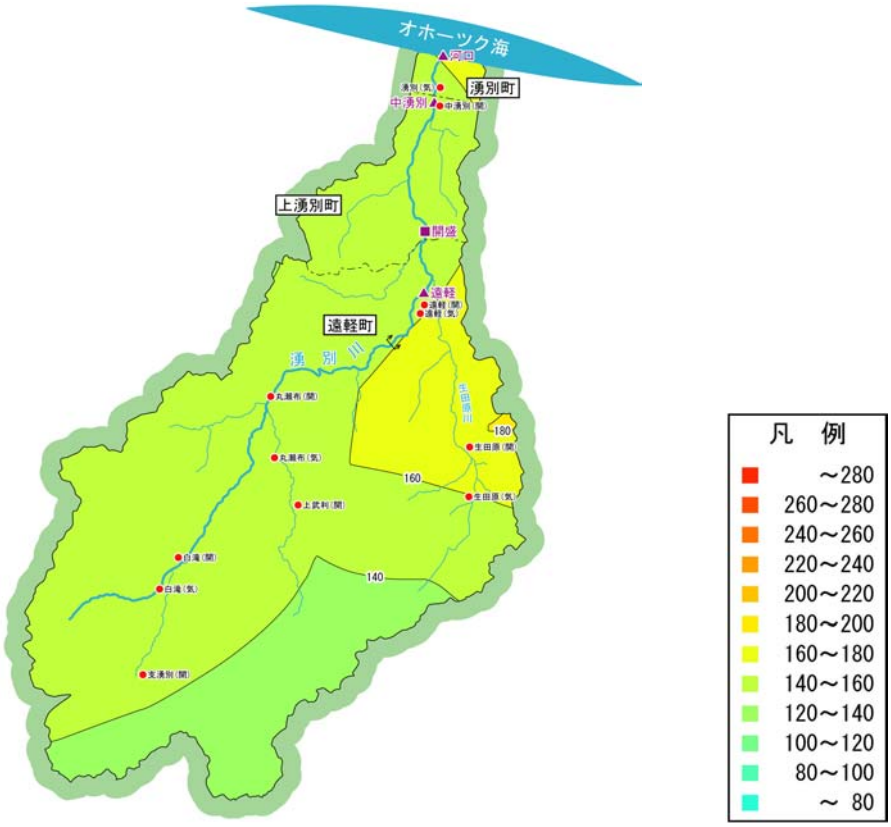
- **平成 13 年 9 月 10 日～12 日洪水**

北海道は 9 日から本州より伸びる気圧の谷の中に入った状態が続き、秋雨前線が 10 日から北海道付近に停滞した。11 日にかけて前線は太平洋沿岸に南下したが台風 15 号から湿った緩湿気流が入って、前線活動が活発化した。

湧別川流域では、丸瀬布、遠軽、開盛、中湧別観測所の全ての観測所において警戒水位を超えた。中湧別観測所では 64 時間にわたり、警戒水位を超過していたが、堤防決壊を超過していたが、堤防決壊などの外水氾濫には至らなかった。しかし、清川橋下流や開盛橋上流などでは、河岸浸食が堤防近辺にまでおよび、一部危険な状況となっている。

これらの影響で、管内では 3 日間にわたって雨が降り、湧別川の中湧別で 170㎜、丸瀬布で 154㎜ を記録した。

写真 4-4　平成 13 年 9 月洪水における湧別川の状況



- **平成 18 年 10 月 7 日～12 日洪水**

10 月 7 日昼前から雨と風が次第に強まり、7 日夜から 9 日にかけて記録的な大雨となり、降り始めからの総雨量が 120㎜ から 300㎜ 前後を記録する大雨となった。この雨は本州南の前線上に発生した低気圧が、台風 16 号及び台風 17 号からの暖かく湿った空気を大量に取り込み、活動が活発になったことにより、もたらされた。

湧別川流域では、上流域の支湧別(182㎜)、上武利(237㎜)、生田原(239㎜)、丸瀬布(212㎜)及び中流域の遠軽(262㎜)において洪水期において、17 時間にわたり危険水位を超え、開盛左岸築堤で堤防法面決壊が発生し、緊急復旧工事が行われるなど、非常に危険な状態となり、河口部の旧湧別漁港周辺において外水氾濫が発生した。また、上湧別町、湧別町をはじめとする地域で農地や道路が冠水したほか、排水ポンプ車による内水排除等の水防活動が行われた。

湧別町では、8 日 13 時頃 1 地区 285 人に対し、避難指示が、8 日 10 時頃より 4 地区 481 人に避難勧告が発令された。また、上湧別町で 8 日 13 時頃 1 地区 110 人に、遠軽町で 8 日 10 時頃より 6 地区 198 人に対し避難勧告が発令された。被害は湧別町、上湧別町、遠軽町における住家一部破損 1 棟、床上浸水 16 棟、床下浸水 93 棟、浸水人口 302 人である。また、湧別町、上湧別町、遠軽町において上水道の被害があり合計約 4,450 世帯で断水し、自治体職員や自衛隊などによる給水支援と復旧作業が行われた。

写真 4-5　平成 18 年 10 月洪水における湧別川河口部の被災状況

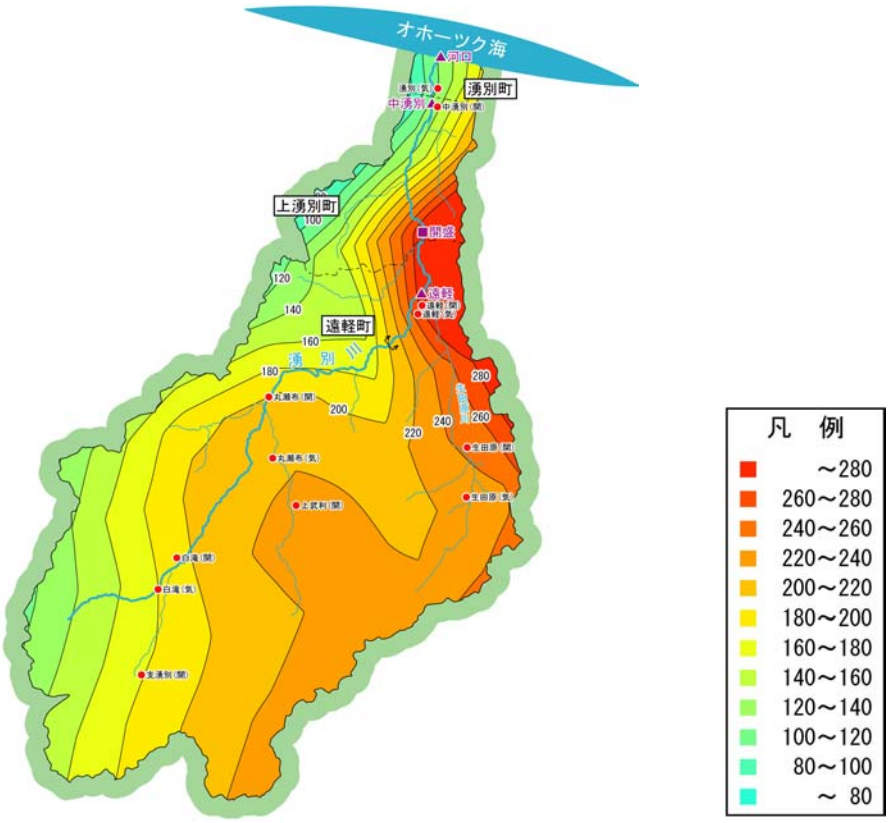


図 4-4　湧別川の総降雨量分布（平成 18 年 10 月）

4-2 治水事業の沿革

昭和 9 年から第 2 期拓殖計画の一環として、大正 11 年 8 月洪水にもとづき開盛における計画高水流量を 1,800㎥/s として、遠軽町、湧別町の工事が実施されている。

昭和 32 年には、昭和 33 年度以降の改修総体計画を立案することになり、再検討された。大正 11 年 8 月 25 日の中湧別 7 号線地先における洪水痕跡及び中湧別観測所における日雨量 145 ㎜から 1,800㎥/s と計画高水流量が決定された。

その後、昭和 45 年に湧別川工事実施基本計画が策定されたが、計画高水流量は遠軽において 1,350㎥/s、開盛において 1,800㎥/s と変更されていない。

次に主な改修工事を列記する。

4-2-1 戦前の治水事業

[北海道庁初期の治水工事(明治 19 年～明治 43 年)]

湧別川水系において、明治 18 年に初めて農業に従事する者があったが、明治 26 年に下流部の湧別原野区画開放されるに及び漸次農民の移住を見るようになり、明治 30 年 5 月屯田兵の入地によって本格的に開拓が始められた。当時の湧別川はほとんどが原始河川のままで、毎年の融雪洪水により大きく河状を変化させていたが、部分的に応急的な工事が行われたにすぎなかった。

[第一期拓殖計画による治水事業(明治 43 年～昭和初期)]

大正 4 年河川平面測量開始以来、水位、流量並びに気象の観測、河川縦横断、流域内における水害並びに経済状況調査等、治水計画に要する全ての基礎資料の収集につとめ、大正 8 年に至り、流域内被害の最も大きい遠軽から下流河口に至る区間に対して、治水工事の計画が立てられたが着工に至らず、治水工事は遠軽橋下流付近において僅かに応急的護岸及び小堤防を施工したにすぎなかった。

[第二期拓殖計画による治水事業(昭和 2 年～昭和 21 年)]

湧別川における本格的な治水工事は、昭和 7 年の水害により治水工事施工が急務となり、昭和 9 年にようやく河口から上湧別間の本格的な治水工事が着手された。

イ．切替工事

河口から湧別橋に至る区間において、昭和９年、延長 2,370m の切替工事に着工し、昭和 12 年通水した。また、昭和９年には上湧別 17 号地先において延長 134m の切替工事に着手、昭和 10 年通水した。

ロ．堤防工事

堤防工事は昭和９年に着工し、河道の乱流を整正しつつ施工し、新水路掘削土を極力流用して行った。昭和 21 年までには湧別左右岸、社名淵逆水堤、遠軽左岸などの築堤工事がなされた。

ハ．護岸工事

主として鉄線蛇籠工、帯梢柵工等の工法で施工を行った。

4-2-2 戦後の治水事業

終戦直後の混乱期においては、治水事業は応急的工事に止まっていたが、昭和 25 年北海道開発法の制定をみ、昭和 27 年第 1 次 5 ヶ年計画に着手するに至った。

沿岸地域の開発の進展と河状の変化等を合わせ、既定計画の見直しもかねて昭和 26 年より改修計画の基本調査を実施し、昭和 32 年には昭和 33 年度以降の改修総体計画を立案することとなり、再検討がされ本計画に従って工事を進めてきた。

その後経済の発展及び諸情勢の変化もあり昭和 35 年度において、上流地区即ち遠軽右岸及び野上左右岸並びに富美築堤を追加することを認められ、これらを総合して昭和 38 年、湧別川改修総体計画が策定され、更に昭和 44 年に一級水系に指定され、昭和 45 年に湧別川水系工事実施基本計画が策定された。

昭和 43 年度以降の第 3 次及び第 4 次治水事業 5 ヶ年計画では、遠軽左右岸築堤、上左岸築堤に着手することとし、附帯工事については鉄道橋遠軽橋を完了した。

昭和 52 年度以降の第 5 次治水事業 5 ヶ年計画では、他事業関連の支川処理と遠軽地区の築堤を完成した。

昭和 57 年度以降の第 6 次治水事業 5 ヶ年計画では、現漁港までの築堤を実施した。また、遠軽地区の岩盤掘削に着手し完了した。

昭和 62 年度以降の第 7 次治水事業 5 ヶ年計画では、野上右岸築堤と 1 号橋の改築を行った。

平成 4 年度以降の第 8 次治水事業 5 ヶ年計画では、遠軽地区桜づつみモデル事業の着手と護岸整備を行った。

平成 9 年度以降の第 9 次治水事業 5 ヶ年計画では、河口右岸無堤部の有堤化の着手と開盛頭首工の改築を行った。

表 4-3に湧別川における主要な工事の状況を示した。

表 4-3　明治以後の湧別川の主要な治水事業年譜

関連事業		年代	治水史
		1896（M29）	河川法公布される
		1907（M40）	網走土木派出所が設置される
北海道第1期拓殖計画 (明治43年～昭和元年)		1915（T 4）	湧別川の測量調査始まる
		1919（T 8）	河口～遠軽間の治水計画樹立
北海道第2期拓殖計画 (昭和2年～昭和21年)		1934（S 9）	河口～湧別橋間及び上湧別17号地先切替着手 第3湧別川鉄道橋～25号間右岸築堤着手 支川ヌッポコマナイ川逆水堤着手
		1935（S10）	上湧別17号地先切替工事完了
		1937（S12）	河口～湧別橋間切替工事完了 第3湧別川鉄道橋～25号間右岸築堤暫堤完成 湧別川左右岸築堤のうち1、2、4、5号樋管完成
		1938（S13）	支川ヌッポコマナイ川逆水堤完了 湧別右岸築堤(0号～第3湧別川、鉄道橋間)完成
		1939（S14）	湧別左岸築堤(0号～第3湧別川、鉄道橋間)完成
		1940（S15）	湧別左岸築堤(第3湧別川鉄道橋より上流)完成
		1941（S16）	支川社名淵逆水左右岸、河口導流堤着手
		1942（S17）	遠軽左岸築堤着手
		1943（S18）	遠軽左岸築堤暫定完成
		1944（S19）	河口導流堤(ケーソンにて)144.6m完成
戦後の空白時代 (昭和22年～昭和26年)		1948（S23）	河口導流堤継続施工
		1949（S24）	河口導流堤継続施工
		1950（S25）	河口導流堤捨石補充
		1951（S26）	上湧別築堤(開盛～25号)拡巾 湧別右岸築堤(5号～6号)拡巾 北海道開発局が発足、網走開発建設部が設置される
第1期北海道総合開発計画 (昭和27年～昭和37年)		1952（S27）	開盛左岸築堤着手
		1953（S28）	遠軽左岸築堤暫定拡巾着手
		1954（S29）	遠軽左岸築堤完了
		1955（S30）	上湧別築堤暫定拡巾着手
		1956（S31）	上湧別築堤暫定拡巾完了 中湧別築堤暫定拡巾着手
		1957（S32）	中湧別築堤暫定拡巾継続施工
		1958（S33）	中湧別築堤完了、社名淵川逆水堤完了 開盛左岸堤概成
	第一次治水五ヶ年計画 (昭和35年～昭和39年)	1963（S38）	富美左岸築堤着手
	第二次治水五ヶ年計画 (昭和40年～昭和44年)	1968（S43）	富美左岸築堤完了
		1969（S44）	開盛左岸築堤完了 湧別川１級河川に指定される
	第三次治水五ヶ年計画 (昭和43年～昭和47年)	1970（S45）	上湧別右岸築堤完了
		1971（S46）	遠軽右岸築堤着手
	第四次治水五ヶ年計画 (昭和47年～昭和51年)	1973（S48）	遠軽右岸築堤完了
		1974（S49）	遠軽左岸築堤着手
		1976（S51）	遠軽橋下流岩盤掘削着手
	第五次治水五ヶ年計画 (昭和52年～昭和56年)	1977（S52）	遠軽橋下流岩盤掘削完了
		1978（S53）	附帯工事野上橋完了
		1979（S54）	附帯工事いわみ橋着手、野上左岸築堤完了 野上右岸築堤概成
		1980（S55）	湧別左岸築堤嵩上げ
		1981（S56）	湧別左岸築堤下流伸長、附帯工事いわみ橋完了
	第六次治水五ヶ年計画 (昭和57年～昭和61年)	1982（S57）	湧別右岸築堤下流伸長 遠軽左岸(社名淵川合流点上流)掘削着手
		1983（S58）	遠軽左岸(社名淵川合流点上流)掘削完了 野上右岸築堤上流伸長、附帯工事1号橋着手
		1984（S59）	湧別左岸5号樋門改築
		1985（S60）	湧別右岸4号樋門改築
		1986（S61）	上湧別築堤嵩上げ(昭和61年～平成2年)
	第七次治水五ヶ年計画 (昭和62年～平成3年)	1987（S62）	遠軽左岸築堤護岸着手
		1988（S63）	野上右岸築堤着手完了
		1990（H 2）	附帯工事1号橋完了
		1991（H 3）	上湧別橋下流右岸水利工着手(平成3～6年)
	第八次治水五ヶ年計画 (平成4年～平成8年)	1992（H 4）	中湧別築堤拡幅着手(平成11年完了)
		1993（H 5）	遠軽地区桜づつみモデル事業着手(平成8年完了)
	第九次治水七ヶ年計画 (平成9年～平成15年)	1997（H 9）	河川法改正
		1998（H10）	湧別右岸無堤部の有堤化着手
		2001（H13）	湧別川水辺プラザ(遠軽町)事業登録 オホーツク水防公開演習
		2002（H14）	湧別川水辺プラザ(遠軽町)事業着手
		2004（H16）	河川等管理用光ファイバネットワーク事業着手
		2005（H17）	湧別川水辺プラザ(遠軽町)事業完了

※ 網走4河川治水事業概要より

5.水利用の現状

5-1 水利用の実態

湧別川水系における利水の現況は、表 5-1に示すとおりであり、許可水利権は 22 件あり、最大取水量の合計は約 37㎥/s である。この内、農業用水としては約 2,500ha の耕地に最大 1.1㎥/s が許可されている。

表 5-1　湧別川水系 水利用現況

種　　別	件数	取水量（㎥/s）
かんがい用水 (かんがい面積:2,477.20ha)	9	1.121
水道用水	4	0.185
工業用水	1	0.018
その他	5	0.202
(小　　計)	19	1.526
発電用水(最大取水量)	3	35.270
合　　計	22	36.796

参考文献:一級水系水利権調書(北海道開発局) 平成 19 年 1 月現在

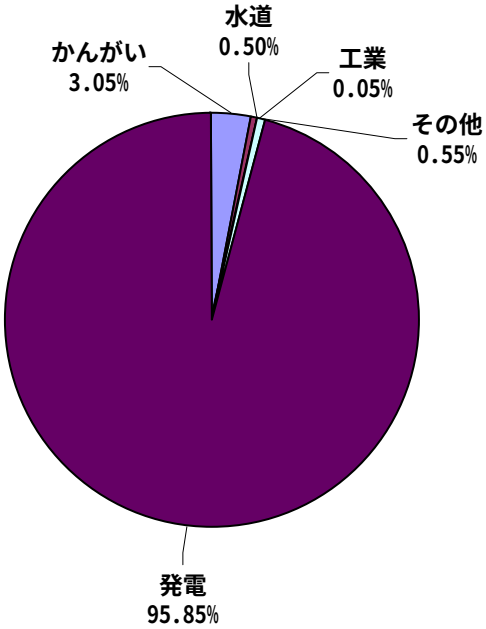


図 5-1　目的別水利用割合

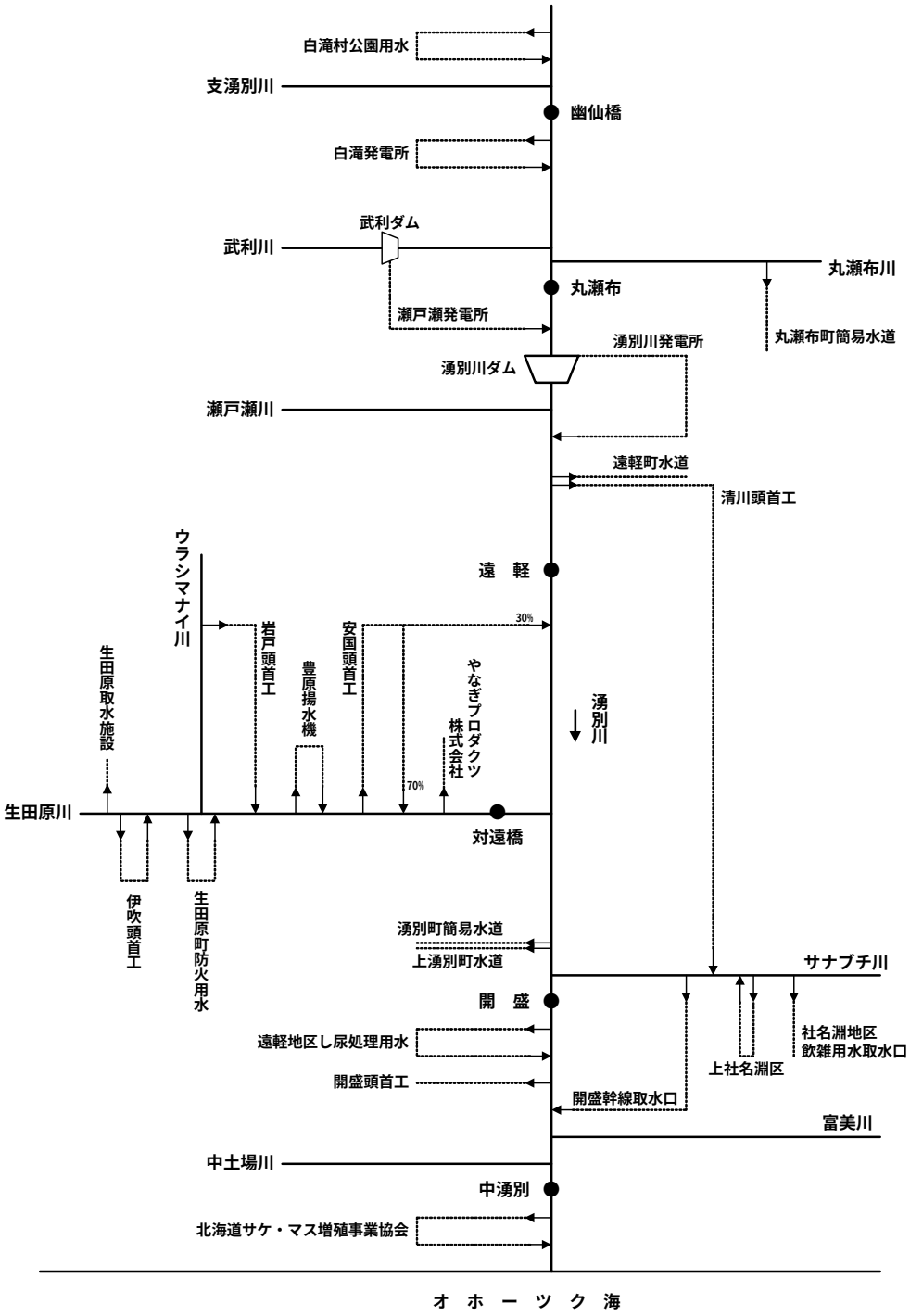


図 5-2　湧別川 水利模式図

5-2 渇水被害及び渇水調整

湧別川流域は、降水量が少ないにもかかわらず、広大な森林による保水機能や天狗岳、武利岳、北見富士などの融雪水、気温の低いことから過去において水不足などで大きな問題は生じていない。発電用水に代表される利水においても渇水時において渇水被害の報告はされていない。

6.河川流況及び水質

6-1 河川流況

開盛地点における流況は、表 6-1のとおり、昭和 45 年から平成 17 年までの 36 年間の平均で、低水流量約 10.7㎥/s、渇水流量約 7.6㎥/s となっている。

表 6-1　開盛地点観測流量 流況一覧表（単位;㎥/s）

年	データ数	欠測数	最大	豊水	平水	低水	渇水	最小	平均
S45	365	—	254.17	22.17	14.14	10.57	8.73	8.73	31.94
S46	365	—	531.19	46.68	20.93	12.07	6.98	6.98	35.76
S47	329	37	240.73	32.56	19.29	10.35	8.01	7.44	31.11
S48	365	—	392.02	49.91	24.99	16.84	11.34	9.37	47.29
S49	365	—	219.06	42.64	24.40	13.42	10.04	8.82	36.02
S50	365	—	614.13	55.77	32.83	15.44	7.87	6.85	53.08
S51	366	—	97.56	27.88	12.60	10.30	8.06	6.98	23.06
S52	365	—	196.66	24.80	11.91	9.37	7.61	6.72	26.94
S53	365	—	188.25	25.53	14.34	9.83	6.50	5.95	26.51
S54	365	—	377.26	34.20	16.71	9.92	6.78	5.81	32.21
S55	366	—	166.98	26.24	15.30	10.70	8.20	6.00	24.69
S56	365	—	828.23	42.72	15.32	10.40	7.78	7.28	38.46
S57	365	—	123.21	30.63	13.96	9.15	5.91	4.48	26.03
S58	365	—	126.38	24.67	14.88	8.19	6.47	6.14	19.67
S59	366	—	139.10	15.41	9.92	7.78	4.44	2.92	18.64
S60	365	—	115.57	25.26	16.23	9.02	4.48	4.48	22.56
S61	365	—	130.88	18.77	10.59	7.82	5.50	4.94	19.78
S62	365	—	176.03	30.69	16.12	10.17	6.44	5.59	25.60
S63	366	—	232.85	28.89	12.74	9.54	7.16	5.39	26.51
H 1	365	—	241.64	33.18	15.94	10.37	8.13	7.01	29.72
H 2	365	—	345.53	37.33	20.08	10.84	8.64	7.79	33.01
H 3	365	—	127.31	26.06	15.27	11.18	8.79	8.12	25.24
H 4	366	—	552.55	48.89	28.70	14.38	6.72	5.29	38.25
H 5	365	—	142.98	34.16	13.91	11.55	8.80	4.77	28.38
H 6	365	—	605.98	33.34	14.68	9.98	7.64	6.77	34.98
H 7	364	1	125.83	38.40	24.62	13.53	7.60	7.21	29.89
H 8	366	—	219.23	31.00	15.18	11.38	9.00	8.14	31.46
H 9	365	—	123.29	27.52	13.21	9.13	7.87	7.72	23.91
H10	365	—	802.03	36.64	20.07	10.15	8.04	7.97	31.57
H11	365	—	236.93	25.94	14.63	10.82	6.91	5.32	29.87
H12	365	1	335.82	36.52	17.73	11.68	7.42	7.01	33.56
H13	363	2	600.81	39.87	17.77	10.74	7.92	7.37	37.36
H14	365	—	259.33	27.40	16.46	10.53	8.85	8.85	27.25
H15	365	—	190.22	16.20	10.37	8.05	7.01	7.01	20.36
H16	366	—	243.85	20.68	14.40	10.21	8.37	8.37	28.07
H17	365	—	220.17	27.72	12.02	9.23	7.56	7.56	24.72
最 大 値			828.23	55.77	32.83	16.84	11.34	9.37	53.08
平 均 値			292.33	31.84	16.73	10.68	7.60	6.75	29.82
最 小 値			97.56	15.41	9.92	7.78	4.44	2.92	18.64
近年36年間(S45～H17)第3位			123.21	18.77	10.59	8.05	5.50	4.48	19.78
近年30年間(S51～H17)第3位			123.21	18.77	10.59	8.05	5.50	4.48	19.78
近年20年間(S61～H17)第2位			125.83	18.77	10.59	8.05	6.44	4.94	20.36
近年10年間(H 8～H17)第1位			123.29	16.20	10.37	8.05	6.91	5.32	20.36

注)流域面積:1,334.8㎞^{2}

なお、統計期間は流量観測が行われている期間のうち、時刻流量が整理され、日平均値の信頼性の高い期間とした。

6-2 河川水質

湧別川流域では、表 6-2及び図 6-1に示すように水質環境基準が指定されており、支湧別川合流点から上流側および丸瀬布川の丸瀬布取水口から上流側は AA 類型、支湧別川合流点および丸瀬布取水口から下流側は A 類型に指定されている。

基準点は中湧別橋、補助基準点は遠軽橋であり、それぞれ公共用水域の水質測定計画に基づき、水質測定が行われている。

現況水質のうち、BOD75%値は図 6-2に示すように概ね環境基準値を下回る程度で推移している。

表 6-2　環境基準類型指定状況（昭和 47 年 4 月 1 日 北海道告示）

水域の範囲	類型	達成期間	環境基準点名
湧別川上流 「支湧別川合流点から上流(支湧別川を含む)」	AA	イ	白滝橋
湧別川下流(1) 「丸瀬布川の丸瀬布取水口から上流」	AA	イ	丸瀬布町簡水 予備取水口
湧別川下流(2) 「支湧別川合流点及び丸瀬布取水口から下流」	A	イ	中湧別橋
			遠軽橋

注）イ;直ちに達成

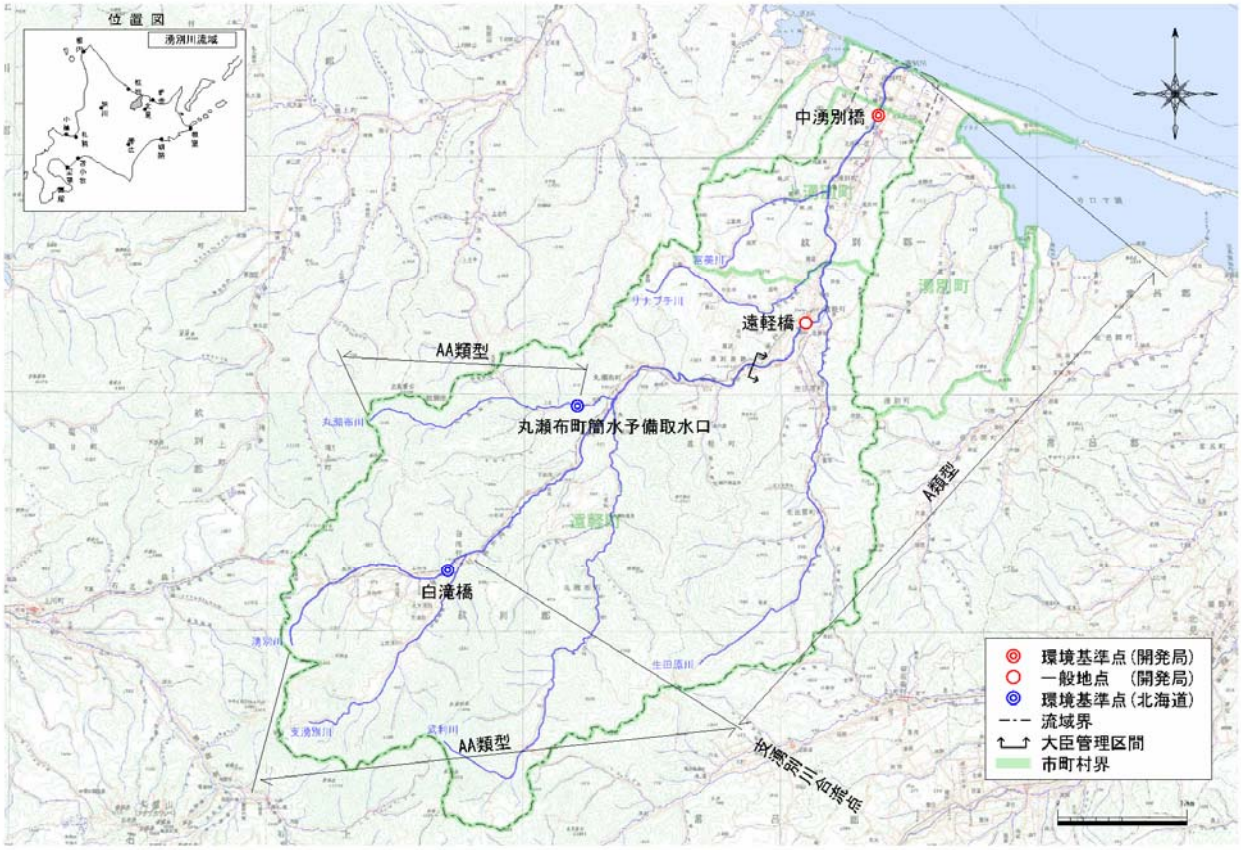
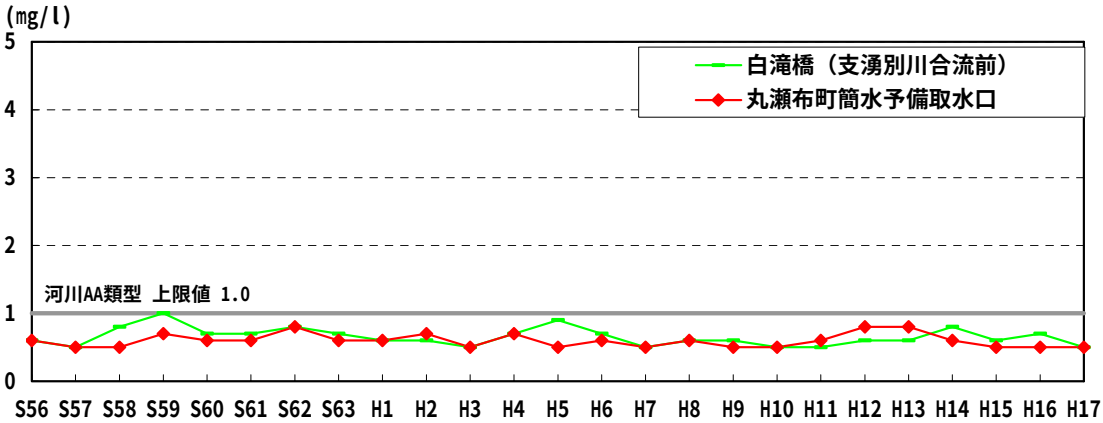
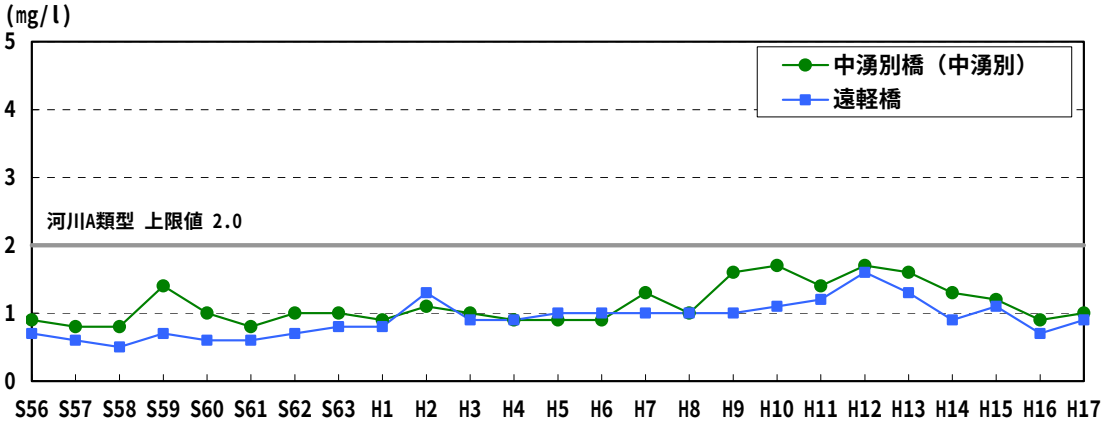


図 6-1　湧別川水系 水質環境基準地点及び類型指定区間



湧別川における水質(BOD75%値)の経年変化 <AA類型>



湧別川における水質(BOD75%値)の経年変化 <A類型>

図 6-2　湧別川における水質(BOD75%値)の経年変化

7.河川空間の現状

7-1 河川敷等の利用の状況

7-1-1 河川敷地の利用状況

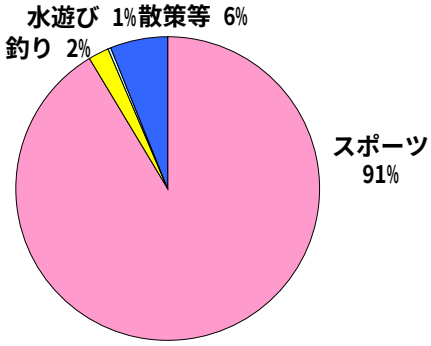
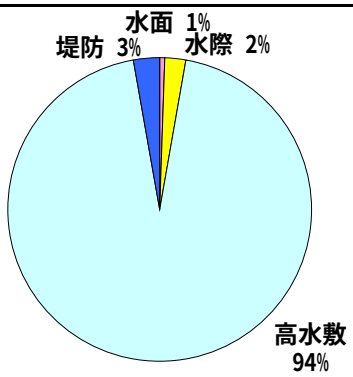
湧別川の年間河川空間利用者総数(推定)を以下に示す。

平成 15 年度の利用者数の推計は約 18 万人で、沿川市町村人口から見た年間利用回数は約 5.2 回/人である。

利用形態別では、スポーツ利用が約 91%を占め、最も多く、次いで散策等約 6%、釣り・水遊びの利用者がわずかにみられた。

利用場所別では、利用形態を反映して高水敷が 94%と最も多く、次いで堤防が 3%、水際、水面が 2%、1%であった。

今後もスポーツや散策等を主体とした高水敷利用の活発な河川利用が期待される。

区分	項目	平成15年度 推定値(千人)	平成15年度 グラフ
利用形態別	スポーツ	168	
	釣り	4	
	水遊び	1	
	散策等	11	
	合計	184	
利用場所別	水面	1	
	水際	4	
	高水敷	174	
	堤防	5	
	合計	184	

7-1-2 高水敷の利用状況

高水敷は、洪水時以外は未使用であるよりも洪水流通時管理面で支障の生ずることがなく、かつ、河川の公共用物としての性格にあった利用がなされる場合は、河川にとって好ましいものである。オープンスペースの少ない都市部では、河川空間の存在は貴重であり、河川敷地の緑地化、公園化を推進し、積極的に開放、利用を図っている。利用状況は以下のとおりである。

表 7-1　河川敷地の占用状況（直轄管理区間）

河川敷地占用許可実態調書（1）［河川敷地利用状況］　(1)敷地占用に係るもの

網走開発建設部　網走川水系　湧別川

占用目的	件数	面積（㎡）	備考
公園・緑地	8	1,063,663.78	
運動場	1	70,801.50	
採草放牧地	55	862,368.70	
畑	3	7,352.50	
自動車練習場	1	29,268.12	
水産物干場	18	16,016.80	
その他敷地	2	37,020.76	
計	88	2,086,492.16	

河川敷地占用許可実態調書（1）［河川敷地利用状況］　(2)工作物設置に係るもの

網走開発建設部　網走川水系　湯別川

占用目的	件数	面積（㎡）	備考
住宅	6	5,572.40	
倉庫・物置等	5	701.42	
橋梁	12	44,055.18	
道路	18	63,562.98	
電柱	16	75.00	
支線・支柱	17	31.50	
H柱	4	14.00	
鉄塔	2	164.23	
電線架空横断	26	14,379.58	
橋梁添架	25	3,675.82	
埋設物	29	684.26	
水路	5	1,769.92	
樋門・樋管	1	565.50	
その他工作物（建物）	2	218.60	
その他工作物（建物以外）	6	109,369.38	
計	174	244,839.77	
合計	262	2,331,331.93	

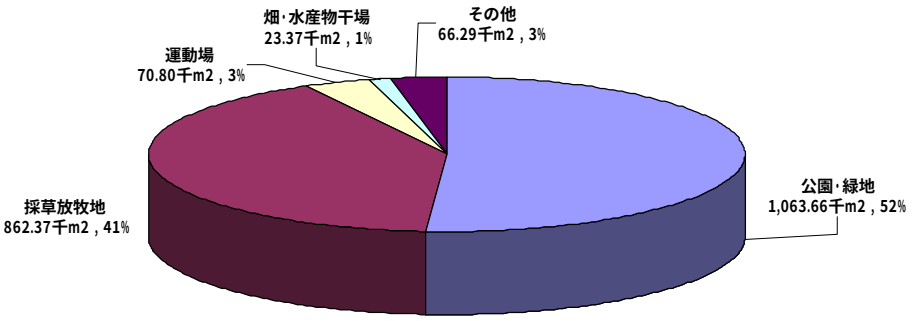


図 7-1　高水敷占用状況(敷地)

7-2 河川の利用状況

湧別川における河川利用状況は、下流側ではゴルフ場やパークゴルフ場、上流側では公園緑地、運動公園等が整備されている。特に直轄管理区間内では、遠軽町での桜づつみやパークゴルフ場、中湧別町でのリバーサイドゴルフ場、湧別町のパークゴルフ場が特徴的である。また、夏には「つり大会」、「夢里くだり」、「燈ろう流し」、「がんぼう夏まつり」等、冬には「クロスカントリースキー大会」等、四季を通じて様々なイベントの会場として利用されている。

写真 7-1　湧別川 川の学校

写真 7-2　遠軽がんぼうまつり

写真 7-3　湧別原野 100km ｸﾛｽｶﾝﾄﾘｰｽｷｰ大会

写真 7-4　いわね橋下流右岸運動公園

写真 7-5　湧別大橋左岸河川緑地公園

写真 7-6　遠軽橋下流左岸せせらぎ公園

出典:北海道開発局　網走開発建設部より

8.河道特性

湧別川は、その源を北海道紋別郡遠軽町の天狗岳(標高 1,553m)に発し、山間部の遠軽町白滝を流れ、丸瀬布で武利川が合流し、遠軽市街において平野部に出て生田原川を合わせ、湧別町においてオホーツク海に注ぐ、幹川流路延長 87km、流域面積 1,480km^2 の一級河川である。

1) 上流部（源流部～武利川合流点）

源流部から武利川合流点に至る上流部は、渓谷を貫流し、河床勾配は 1/100 以上の急勾配であり、渓流河川の様相を呈している。周囲はエゾマツ、トドマツの針葉樹林、ミズナラ、エゾイタヤ等の混生する針広混交林が広く分布している。山間部を抜けた区間では、明瞭な瀬・淵や部分的に岩河床が露出している箇所もみられ、流れの多様な河川環境を形成し、ハナカジカやオショロコマ等が生息している。

2) 中流部（武利川合流点～生田原川合流点付近）

武利川合流点から生田原川合流点に至る中流部は、河床勾配が約 1/250 程度であり、河道は蛇行を繰り返し中州や寄州が発達しているとともに、瀬・淵が明瞭な河川の様相を呈している。

河川は、サケ、カラフトマス等が遡上してくる他、シベリアヤツメ、エゾトミヨ等が生息している。また、マガモ、コガモ等のカモ類の休息場となっている。河川周辺の山付林には、ヤナギ林のほか、ヤチダモ、ハルニレ林が分布している。高水敷は湿性草本群落が分布しているほか、遠軽市街地では公園等が整備され、イベントやスポーツ等に利用されており、地域住民の憩いの場となっている。

3) 下流部（生田原川合流点付近～河口）

生田原川合流点付近から河口に至る下流部は、河床勾配が約 1/300～1/500 程度であり、河口付近の一部が約 1/800 となっており、全川を通じて比較的急勾配である。

河道は蛇行を繰り返しながら畑地帯を流下しており、砂礫の中州等が見られ、エゾウグイやカラフトマス、ハナカジカ等が生息している。周囲は山付きと畑地が左右岸交互に見られ、オジロワシ、オオワシ、クマゲラ等の鳥類のほか、河畔林内の水溜り等がエゾサンショウウオやエゾアカガエルの産卵場所となっている。

また、河口付近は比較的緩勾配で、河道は大きく蛇行し、ワンドや細流、瀬・淵等の多様な河川環境を形成している。この区間には感潮区間があり、マルタウグイやエゾハナカジカ等の感潮域に生息する魚類の生息地になっており、河口付近の緩やかな流れは、ヒシクイ、オシドリ等のガン・カモ類やカモメ類の越冬地及び渡りの中継地として利用されている。また、河口部左岸の砂丘地には、ハマニンニクやハマナスの砂丘植生が生育している。

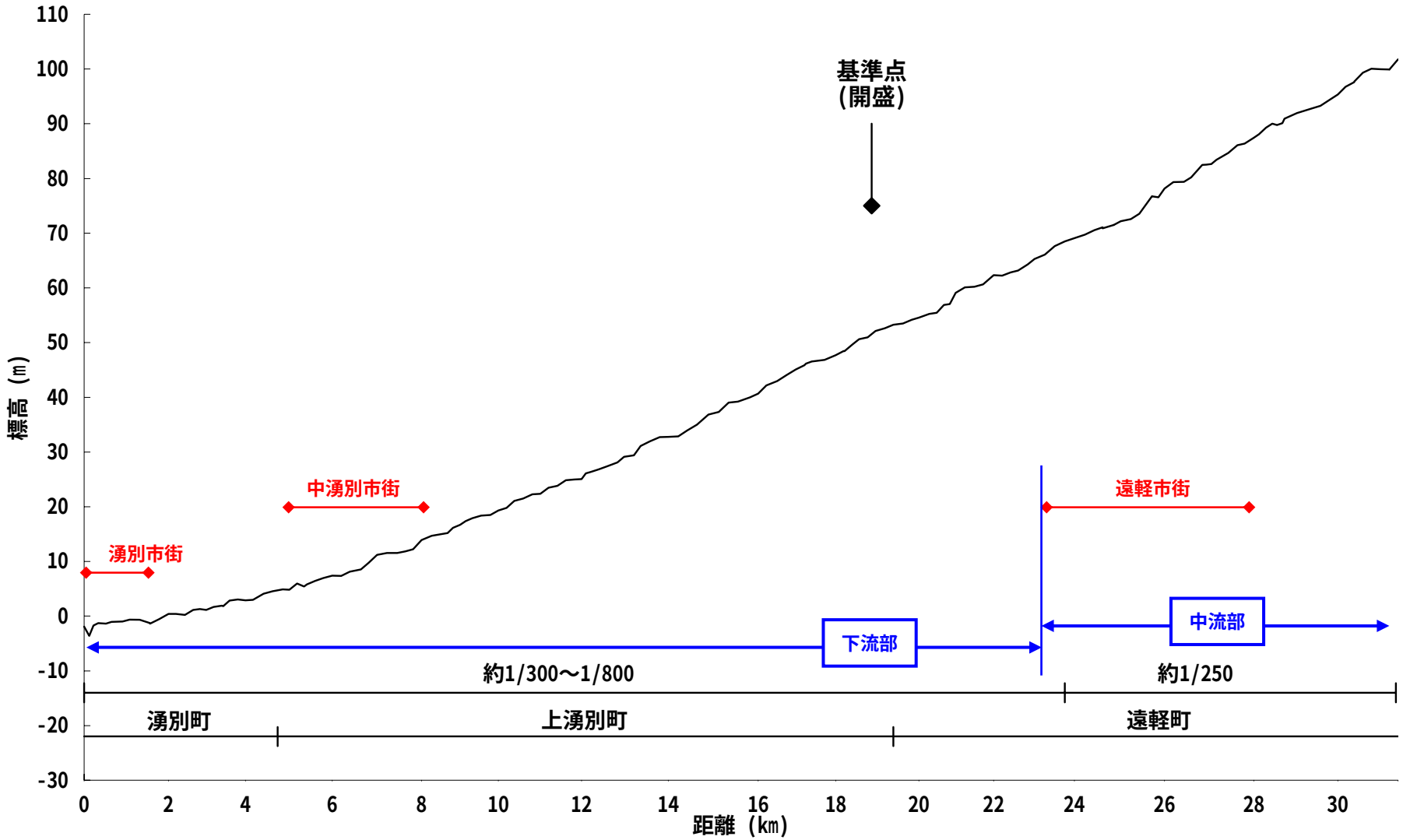
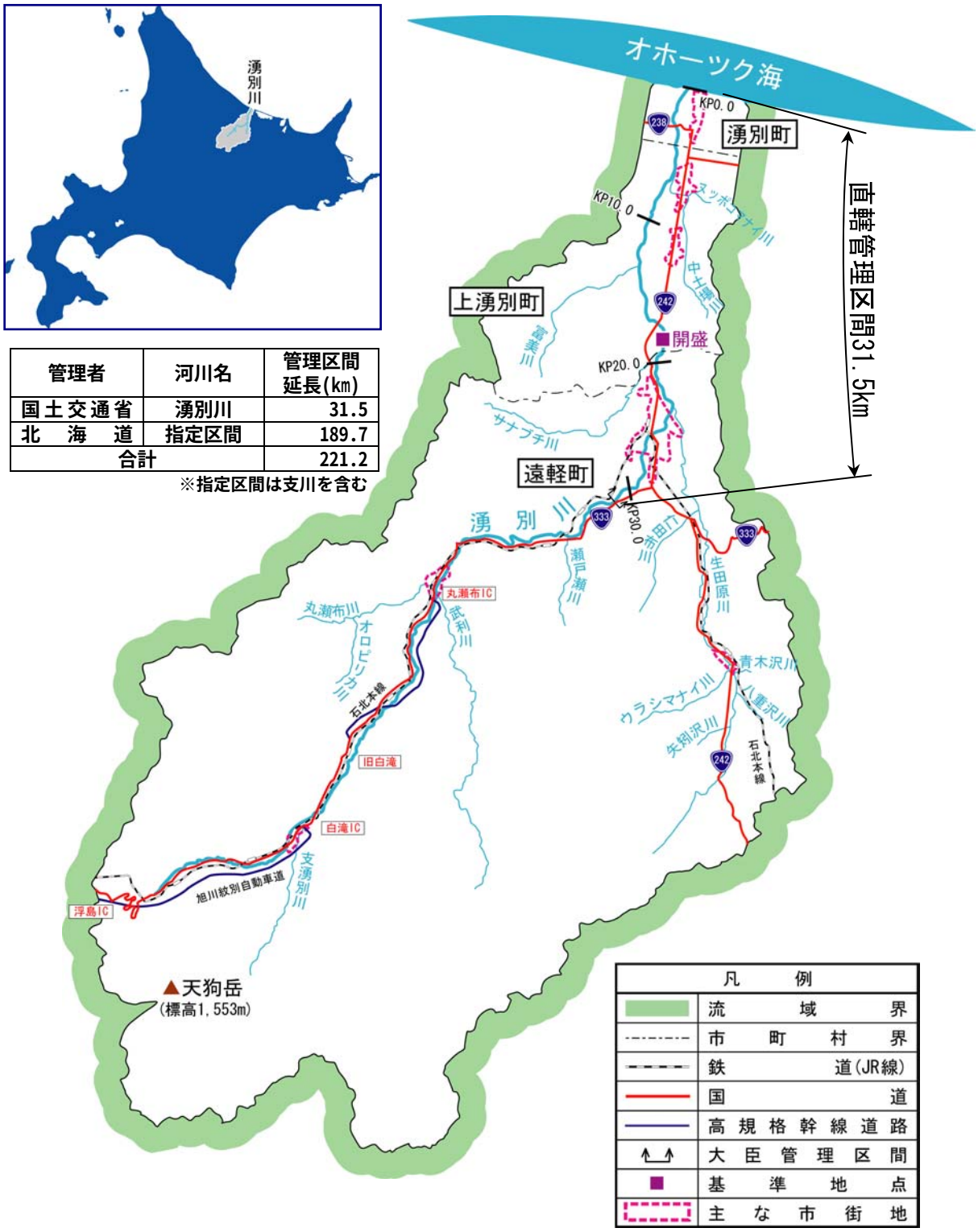


図 8-1　湧別川水系　湧別川　河床高縦断図（直轄管理区間）

9.河川管理の現状

9-1 管理区間

湧別川は、幹川流路延長 87km の一級河川であり、本川の河口より 31.5km 区間を国が管理している。



管理者	河川名	管理区間延長(km)
国土交通省	湧別川	31.5
北海道	指定区間	189.7
合計		221.2

※指定区間は支川を含む

図 9-1　湧別川水系の直轄管理区間位置図

9-2 河川管理施設

湧別川における河川管理施設等の整備状況は下記の通りである。

(1) 堤防

堤防整備の現状(平成 18 年度末現在)は下記の通りである。

表 9-1　直轄管理区間 堤防整備状況

項目	延長 (km)
完　成　堤　防	34.62 (81.0%)
暫　定　堤　防	7.66 (17.9%)
未 施 行 区 間	0.47 (1.1%)
堤防不必要区間	16.50
計	59.25

※ 延長は直轄管理区間の左右岸の計である。

(2) 河川管理施設

堤防、護岸を除く主な河川管理施設は以下のとおりである。

表 9-2　直轄管理区間の主な河川管理施設状況

堰	排水機場	水門	樋門樋管	合計
0	0	0	22	22

9-3 砂利採取

湧別川においては、今までに砂利採取は行われていない。

9-4 水防体制

(1) 河川情報の概要

湧別川では、流域内に雨量観測所(7 箇所)、水位観測所(5 箇所)を設置し、無線等により迅速に情報収集を行うと共に、これらのデータを用いて河川の水位予測等を行い、水防活動に活用している。また、近年では光ケーブル網により接続された遠隔監視カメラを用いた管理も行い、迅速な水防活動に活用されている。

(2) 水防警報の概要

湧別川では、洪水による災害が起こる恐れがある場合に、基準となる水位観測所の水位をもとに市町村を含む水防関係機関に対し、河川の巡視や災害発生防止のための水防活動が迅速かつ的確に行えるように水防警報を発令している。

表 9-3　水防警報対象観測所

河川名	観測所名	はん濫危険水位 (m)	避難はん濫水位 (m)	はん濫注意水位 (m)	水防団待機水位 (m)
湧別川	中湧別	9.60	9.40	7.50	7.10
	遠軽	80.60	80.30	79.30	78.90

(3) 洪水予報

湧別川は、水防法及び気象業務法の規定に基づき、洪水予報業務を実施する洪水予報指定河川に指定(平成 11 年 2 月 26 日付：建設省・運輸省　告示第 4 号)されている。「洪水予報」を気象台と共同して、河川のはん濫が起こる恐れが高まったと予想される時には、洪水注意報と洪水警報の 2 種類を発表している。さらに、これらを補足する必要がある際は洪水情報(雨量や水位の予想)を発表している。

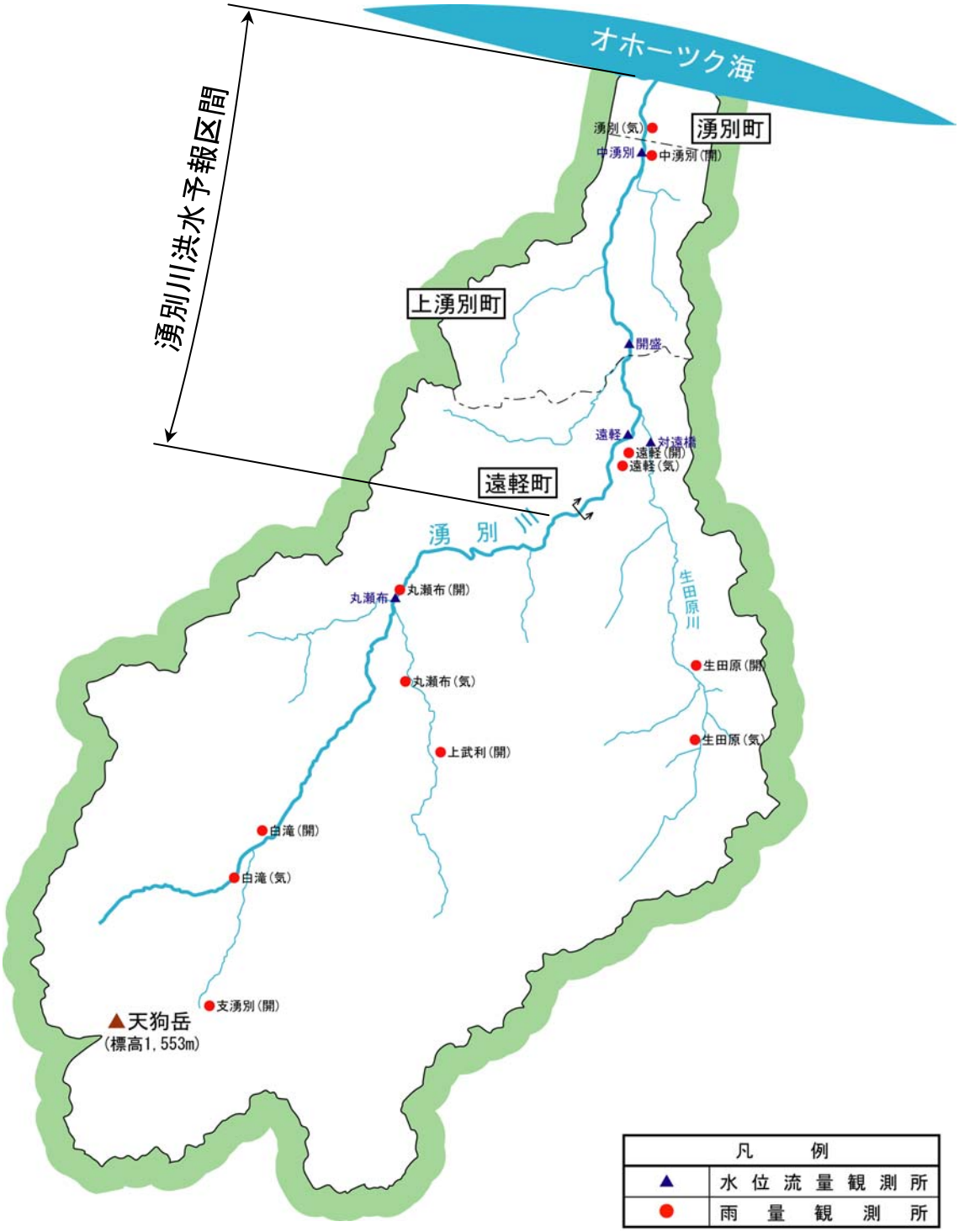


図 9-2　洪水予測区間及び雨量・水位観測所

9-5 危機管理への取り組み

(1) 水防連絡協議会との連携

洪水・高潮等による被害発生の防止または軽減を行うため、国及び地方自治体の関係機関が連携し、住民の避難、水防活動等を迅速かつ円滑に行うために、水防連絡協議会が結成されている。この協議会により、重要水防箇所の合同巡視、水防団、水防資材の整備状況の把握、定期的な水防訓練等を行っている。

(2) 水質事故対策の実施

油類や有害物質が河川に流出する水質事故は、流域内に生息する魚類や生態系のみならず、水利用者にも多大な被害を与えている。水質事故が発生した場合、その被害を最小限にとどめるため、迅速で適切な対応が必要になっている。このため、環境保全連絡協議会により、連絡体制を強化するとともに、水質事故訓練等を行い迅速な対応を行うことが大切であり、また、水質事故に備え、常時から資機材の備蓄を行っている。

(3) 洪水危機管理の取り組み

洪水危機管理に於いて、平常時から危機管理に対する意識の形成を図るとともに、洪水発生時の被害を最小限に抑えるため、浸水想定区域図を公表するとともに水防計画・避難計画の策定の支援、土地利用計画との調整を関係機関や地域住民等と連携して推進している。

9-6 地域との連携

湧別川流域では、湧別川に沿って町が連なっており、湧別川を中心に各地域間での街づくりの連携が進められている。

流域内では、湧別川流域懇談会が設置され、北海道開発局網走開発建設部が主体となり、今後の川のあるべき姿や、川づくりのあり方について、関係河川利用者、地元漁業者、学識経験者、関係行政機関等との意見交換が行われている。

一方、今後、流域のまちづくり事業と連携し、河川を地域レクリエーション、防災、まちづくりの拠点として位置付け、地域と一体となった河川管理を行うことが必要とされている。地域住民と協力して河川管理を進めるためには、インターネット等のメディアを利用する等して、地域住民に様々な河川情報を発信するとともに、地域からの河川整備に対する要望等を集約し、住民参加型の管理体制を構築する必要がある。また、河川清掃や、節水・水の再利用等を通じて、地域住民の河川に対する愛護精神を啓発していくことも重要である。